

毛原廃寺跡

第2次発掘調査報告

2020年3月

奈良県山添村教育委員会
奈良大学文学部文化財学科





序 文

毛原庵寺跡は、山添村大字毛原地内にある奈良時代前期に創建された寺院跡です。大正15年には国の史跡に指定され、これまで行政や地域によって調査・研究や保護に向けた取組が行われてきました。

今回刊行する報告書は、平成15～16年度に計画された「毛原簡易水道改良整備事業」に伴い、平成16年度に実施した発掘調査についてその成果をまとめたものです。

刊行にあたっては、平成30年度に連携協定を締結した奈良大学の協力を得て、文学部文化財学科の坂井秀弥氏に出土遺物の整理作業や報告書の作成をいただきました。

最後になりましたが、現地での調査や報告書の作成にご協力いただきました関係機関並びに関係者のみなさまに心よりお礼申し上げます。

令和2年3月31日

山添村教育委員会
教育長 西久保 良隆



例　　言

1. 本書は奈良県山辺郡山添村大字毛原に所在する、毛原廃寺跡の第2次発掘調査報告である。
2. 本発掘調査は山添村が平成16年（2004）度に計画した、毛原簡易水道改良整備事業（浄水施設整備）に伴う史跡の現状変更による事前調査として実施したものである。

3. 現地調査は平成16年（2004）8月18日から同年11月22日にかけて、奈良県教育委員会文化財保存課及び奈良県立橿原考古学研究所の指導の下、山添村教育委員会の田部剛士（当時）が担当した。平成16年（2004）当時の発掘調査体制は以下のとおりである。

山添村教育委員会 教育長	山脇 長生
事務局長	上森 健文
局長補佐	井久保好信
文化財専門員（発掘調査現地担当）	田部 剛士

4. 出土遺物の整理作業と本書の作成・編集については、平成29年度（2017）から平成31年度（2019）に実施し、山添村教育委員会の井上有貴（主査）、向井一俊（主事補）と奈良大学文学部文化財学科の坂井秀弥（教授）が担当した。整理作業および報告書作成・執筆については、以下の者が行った。執筆分担は文末に明記した。なお、平成30年度の奈良大学博物館の展示と平成31年度の整理作業・報告書作成については、山添村と奈良大学の連携協力に関する協定に基づいて実施した。

山添村教育委員会	井上有貴（主査）、向井一俊（主事補）
奈良大学文学部文化財学科	坂井秀弥（教授）、稻垣 篤・田中秀弥（以上、大学院博士前期1年）、滑川有花子・野田真菜・西田裕之（以上4年）、川嶋泰輔（3年）、
鈴鹿市文化スポーツ部文化財課	田部剛士（副主幹）
奈良県地域振興部文化財保存課	岡田雅彦（主査）

5. 現地の発掘調査及び本書作成のためには以下の協力があった。記して感謝の意を表したい。（敬称略・順不同）
現地調査：長谷川義明・井戸竜太（以上、調査補助員）
整理作業：近江俊秀（指導）、松島隆介・岸上維楓・山本美喜（以上、写真撮影）

6. 調査に関わる出土遺物や遺構図面、写真資料などの調査記録の全ては、山添村教育委員会において保管している。出土遺物の注記は「毛ハラⅡ」「トレンチNO.」「取上げ通し番号」とした。取上げ通し番号は台帳に記載がある。

7. 遺跡調査コードは、毛原廃寺跡[第2次：102-0012]である。



目 次

序文	
例言	
I. 発掘調査に至る経緯	1
II. 遺跡の位置と環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
III. 毛原廃寺の概要	5
1. 史跡指定と從来の調査	5
2. 碣石からみた主要伽藍	5
IV. 調査の方法と経過	7
1. 発掘作業の経過	7
2. 整理等作業の経過	9
V. 調査の成果	11
1. 層序	11
2. 遺構	11
VI. 遺物	16
1. 瓦類	16
(1)軒丸瓦	16
(2)軒平瓦	16
(3)丸 瓦	16
(4)平 瓦	18
2. 円筒状瓦製品	24
3. 土器・陶磁器	25
VII. 特論	26
参考・引用文献	34





図版目次

- | | |
|--------------------|------------------------------|
| 1. 軒丸瓦・円筒状瓦製品（カラー） | 7. 平瓦・丸瓦（タタキ・ケズリ・玉縁部） |
| 2. 軒瓦瓦当三次元計測図（カラー） | 8. 軒丸瓦・丸瓦・平瓦（接合部・ケズリ・ナ
デ） |
| 3. 軒丸瓦・軒平瓦 | 9. 平瓦（タタキ・ケズリ等） |
| 4. 平瓦（A1類・B2類） | 10. 円筒状瓦製品 |
| 5. 平瓦（B2類） | |
| 6. 平瓦（B2類・B3類） | |

挿図目次

- | | | | |
|-----------------------|----|------------------------|----|
| 1. 毛原廃寺跡の位置 | 1 | 16. 金堂礎石1・2・3・28平面・断面図 | 14 |
| 2. 毛原廃寺跡周辺の遺跡分布図 | 2 | 17. 2トレンチ調査状況 | 15 |
| 3. 毛原廃寺跡周辺図 | 3 | 18. 1トレンチ西側調査状況 | 15 |
| 4. 毛原廃寺の伽藍推定図 | 5 | 19. 軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦 | 17 |
| 5. 毛原廃寺跡の遠景 | 6 | 20. 平瓦（A1類） | 19 |
| 6. 金堂の標柱と説明板 | 6 | 21. 平瓦（A2類・B2類） | 20 |
| 7. 金堂の礎石 | 6 | 22. 平瓦（B2類・B3類） | 21 |
| 8. 南門の礎石 | 6 | 23. 丸瓦・平瓦のトレンチ出土状況（重量） | |
| 9. トレンチ配置図 | 8 | | 23 |
| 10. 2017年度の整理作業（奈良大学） | 10 | 24. 円筒状瓦製品 | 24 |
| 11. 2018年度の整理作業（奈良大学） | 10 | 25. 土器・陶磁器 | 25 |
| 12. 磂石2・28出土状況 | 11 | 26. 毛原廃寺跡出土瓦・平城宮出土瓦 | 27 |
| 13. 磂石28 | 11 | 27. 毛原廃寺跡出土軒瓦変遷案 | 27 |
| 14. 土層柱状図 | 12 | 28. 毛原廃寺跡関係位置図 | 30 |
| 15. 金堂礎石配置図 | 13 | | |



I. 発掘調査に至る経緯

2003～2004年度にかけて、奈良県山辺郡山添村大字毛原地内において「毛原簡易水道改良整備事業」が計画された。事業対象地域は、奈良時代前期の創建とされる国指定史跡である「毛原庵寺跡」の範囲が含まれ、また、その周辺には過去7回にわたって調査されている「毛原遺跡」が笠置川を挟んだ対岸に存在する。

「毛原簡易水道改良整備事業」は地区内に既設される簡易水道の配管を取り替えるものであったが、事業範囲の一部が史跡地内に含まれたことから、遺構の状況を確認するための調査を実施する必要があった。そのため、現状変更申請を行った。奈良県教育委員会事務局文化財保存課と調査に向けた調整をすることとした。その結果、調査対象地となった「毛原庵寺跡」はこれまでほぼ調査が手付かずで遺構・遺物の包蔵状況が判然としていないことや実際の工事が幅0.6m程度（重機のバケット幅）という矮小な点等を考慮して、ひとまず工事立会として調査を開始することとした。

なお、「毛原庵寺跡」として大正7年（1918）に奈良県史蹟勝地調査会の西崎辰之助氏による現地調査（「史蹟勝地調査会報告書」5）が行われていることから、今回の調査を「毛原庵寺跡」第2次調査とする。（田部、井上）

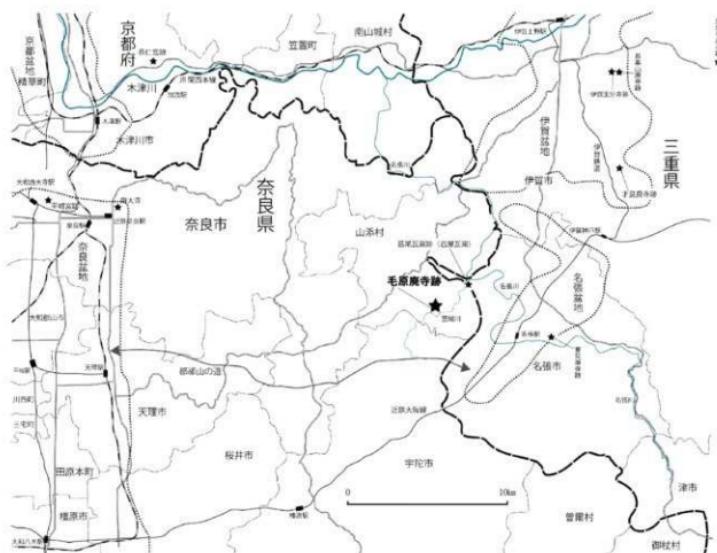


図1 毛原庵寺跡の位置(奈良大学博物館2019より)



II. 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境（図1・2）

毛原廃寺跡が所在する奈良県山添村は、奈良県北東部の三重県境（伊賀国境）に近い大和高原に位置する。東に三重県名張市・伊賀市が隣接し、地形的には上野・名張盆地と連続性が高く、奈良盆地とは隔絶している。大和高原は、平原状の地形（準平原）で、標高は、南部で500m～600m、北部で200m～300mと北へ向かって低くなり、神野山（618m）が山添村の最高地となる。奈良県北東部の三重県との境界には、名張盆地から名張川が北西方向に蛇行しながら流れ、東から西に流れる木津川に合流する。木津川は平城山丘陵の北側に広がる山城平野に流れ出る。

毛原廃寺の瓦窯である岩屋瓦窯は、名張川とその支流である笠間川の合流点に立地する。毛原廃寺跡はそこから笠間川の谷を南西に約2.5kmさかのぼった、北岸の緩やかな南斜面に立地する。毛原廃寺跡から奈良盆地東辺までは15kmあり、名張盆地は5kmほどの距離である。（田中）

2. 歴史的環境（図2・3）

縄文・弥生時代 山添村には、著名な遺跡が所在する。縄文時代は、近畿地方では珍しく、草創期の桐山和田遺跡、北野ウチカタビロ遺跡、早期の大川遺跡がある。大川遺跡は早期の「大川式」の標式資料であり、早期から晩期の堅穴建物が確認されている。布目川流域でも早期の押型文が多数出土しており、中期の広瀬遺跡では堅穴建物が確認されている。大川遺跡で弥生土器の小片が出土しているが、明確な堅穴建物は確認されていない。

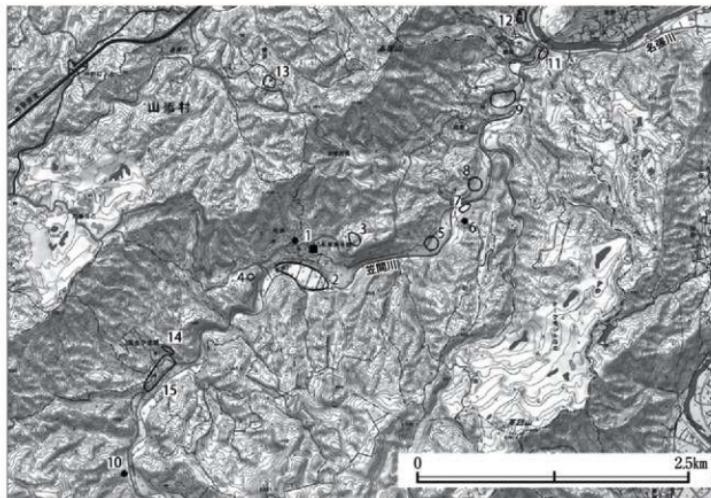


図2 毛原廃寺跡周辺の遺跡分布図(国土地理院 1/40,000)

- 1. 茅原廃寺跡 2. 毛原遺跡 3. カネツキ堂 4. 毛原城跡 5. 銚門道跡
- 6. 平若古墳 7. 幸村道跡 8. 小切山道跡 9. 寺ノ前道跡 10. 下笠岡古墳
- 11. 岩屋瓦窯 12. 葛尾遺跡 13. 勝峯城跡 14. 爪固城跡 15. 下至間道跡





図3 毛原廢寺跡周辺図 (S = 1/5,000)



古墳時代 毛原廃寺跡から北西へ約5.5kmの神野山山頂に立地する王塚古墳と、毛原廃寺跡から東に約1.5kmの笠間川沿いの右岸に平岩古墳（6）がある。王塚古墳は、時期不明の直径20m高さ1.5mの円墳である。平岩古墳は、6世紀後葉～7世紀初頭の横穴式石室である。平岩古墳から笠間川を挟んで対岸の越町遺跡（5）では、古墳時代後期の集落跡が確認されており、数回の建て替えが行われている堅穴建物、掘立柱建物が確認されている。その後、7世紀の住居などは確認されていないが、大西塚ノ本遺跡から須恵器杯戸などが出土している。

奈良時代 毛原廃寺跡から北に約5kmに位置する大西塚ノ本遺跡では、奈良時代中頃の堅穴建物、土坑、平安時代の炉跡、土坑などが確認されている。出土遺物には、「節」「中」「中宮」と墨書きされた土器や、特殊な形の瓶などがある。

岩屋瓦窯 毛原廃寺跡から北東約3kmの笠間川と名張川の合流点には、岩屋瓦窯（11）がある。1961年に県道改良工事により岩屋瓦窯が発見された。1978年、奈良県立橿原考古学研究所（以下「橿原研」と略す）により発掘調査され、毛原廃寺の瓦窯と判明したため、1980年、史跡毛原廃寺跡に追加指定された。3基の瓦窯が同じ場所で操業されており、2回の造り替えが確認された無段半地下式の登窯と1基の有畔式平窯が確認されている。登窯から平窯への過渡的な窯の変化を知ることができる。また、桶巻作りから一枚作りの変化も認められる。調査区外に広がる灰原が確認されており、調査区外に窯が存在すると考えられる。操業時期は、奈良時代中頃～後半と考えられ、同范の軒瓦が毛原廃寺や伊賀国分寺、夏見廃寺などから出土しており、伊賀盆地を中心に瓦が供給されていたことが分かっている。

毛原遺跡 毛原廃寺跡から笠間川を挟んで南に200mに位置する毛原遺跡（2）では、奈良時代の堅穴建物4基と掘立柱建物2棟が確認され、須恵器杯等や板材などがまとまって出土している。出土遺物から毛原廃寺と同時期で短期間に廃絶していることから、両者は何らかの関係が考えられる。

都祁山道 「続日本紀」靈亀2年（715）条に「開大倭国都祁道」とみえ都祁山道と通称される。天理市から奈良市都祁を通過し、名張市で伊勢に向かう道に合流する。「続日本紀」天平12年（740）条に聖武天皇の東国行幸の際に利用したとみえ、平城遷都に伴い平城宮と伊勢を結ぶバイパスとして設定されたと考えられる。この道を通り笠間川を数km下れば、毛原廃寺へも到達できる経路でもある。

東大寺板蟻枠 奈良時代には、都城や南都諸大寺の造営に必要な木材を確保するための植地として大和高原が利用されるようになる。切り出された木材は、名張川と木津川の水運を利用して泉津に陸揚げされたと考えられている。「大安寺伽藍縁起記資料帳」（『寧楽遺文』所収）によると、天平勝宝5年（755）には毛原周辺は東大寺所領の板蟻枠になっている（図28）。泉津の推定地である木津川市上津遺跡では、奈良時代中頃から平安時代の遺構・遺物が確認されている。また、山添村周辺では柵との関連が疑われる奈良市水間遺跡などが確認されている。

中世・近世 平安時代以降も継続して植地として利用される。治承2年（1178）「東大寺三網等陣状案」「東大寺文書」には板蟻枠に黒田庄が成立し、後に藤井庄になると考えられている。

鎌倉時代後期の郷塔といわれる大型の五輪塔が、中近世の畠郷に該当する集落に現存している。五輪塔の紀年銘は古いもので正和2年（1313）・正中2年（1325）である。このことから、少なくとも14世紀前葉には現集落に継続する中世集落が存在したものと考えられる。

中世以降は、山添村には山城が多くみられる。北野腰越遺跡では、溝・石積の井戸などが検出されており、15世紀後葉～17世紀前葉頃の館城跡が確認されている。他に春日城跡・毛原城跡（4）などが確認されている。（田中）



III. 毛原廃寺の概要

1. 史跡指定と從来の調査

毛原廃寺は、大正7年（1918）に、奈良県史蹟勝地調査会委員の西崎辰之助が行った現地調査（西崎1913）により、大型礎石の存在から大規模な寺院として知られるようになり、大正15年（1925）に国の史跡に指定された。まもなく旧農原村（現山添村）が管理団体に指定され、史跡の土地所有者による史跡保存会も結成された。その後1938年、中心伽藍から谷を挟んで西へ100mの位置で行われた県道工事により礎石群が発見され、奈良県技師の黒田昇義が現地調査した。のちにこの建物を食堂に比定する説が出された。

1991年には、樋考研の松田真一・近江俊秀が、それまでの調査成果と現地の礎石や地元に伝わっていた瓦類などを総合的に調査研究した（松田・近江1991）。このなかで、瓦は天平初年に遡るし、755年に施入された東大寺板蠶袖に先立つものとした。平成28・30年度には県道拡幅に伴い西方建物が樋考研により発掘調査された。この調査では、基壇の盛土・礎石抜取穴・溝などを検出している。基壇下層の落ち込みからは、奈良時代前期の土師器・須恵器・瓦が出土している（樋考研2017）。（坂井）

2. 級石からみた主要伽藍（図4）

毛原廃寺跡は東西方向の笠間川の谷を南に見下ろす北側斜面に立地する。廃寺跡の付近で谷の幅が広がり、比較的の眺望も開ける。しかも斜面は緩やかで比較的平坦面が広く、毛原集落の宅地がま

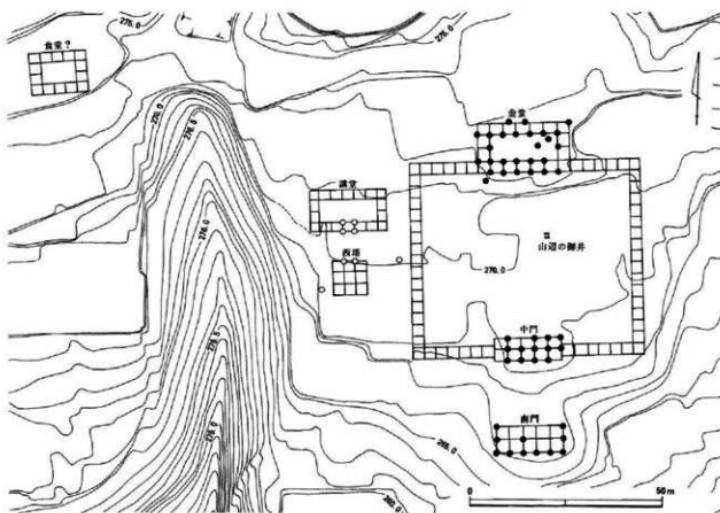


図4 毛原廃寺の伽藍推定図(松田・近江1991より)



とまっている。ここに中心伽藍を構成する金堂・中門・南門が南北に並ぶ。昭和13年（1938）に発見された西方建物は谷を隔てて約100m西に位置する。以下、現状を略述する。

礎 石（図7・8） 金堂基壇の一部（2004年）と西方建物（2016・18年）のほかは発掘調査されていないが、金堂・中門・南門は、礎石が据えられた状態で遺存するものが多く、建物規模がおよそ把握できる。花崗岩の礎石は、金堂で相対的に大きく長軸2mに及ぶものもある。礎石上面の円形の柱座とそれに接続する地覆座の整形・調整が丁寧に施され、建物構造を示唆する。

金堂・中門・南門 金堂は集落内の小路に面した稻荷社周辺にある（図7）。建物の長辺となる桁行は7間（23.5m）、短辺となる梁行は4間（13.2m）で、規模は唐招提寺の金堂に匹敵する。礎石の大きさや造作も合わせると、寺院としての格式の高さがうかがえる。金堂の南約50mの畠地に中門、さらに南約25mの畠地に南門（図8）がある。中門・南門はいずれも同規模の桁行（17.5m）の五間門で、中央3間が扉となる。梁行2間で中門は6.1m、南門は7.1mでやや大きく、地覆座の形状も異なるところがある。

金堂西側の畠地周辺で、講堂・西塔とされる礎石が過去に記録されているが、地表面からは確認できない。確認されている礎石が少ないため、建物の実態は不明である。

西方建物 桁行5間（18m）・梁行4間（10.8m）の四面廂建物で、平成28年（2016）の発掘調査では想定どおりの位置と規模が確認された。かつて食堂の可能性が指摘された。（坂井）



図5 毛原庵寺跡の遠景



図6 金堂の標柱と説明板



図7 金堂の礎石



図8 南門の礎石



IV. 調査の方法と経過

1. 発掘作業の経過

概要

調査はまず、2004年8月18日に仮設管設置のための掘削から実施した。その後は幅0.6mの本管設置の掘削と進んだが、8月26日に未知の礎石（礎石28、図13）が確認されることとなった。そこで、翌27日に奈良県教育委員会文化財保存課と現地にて協議を行い、工事を一時中断して礎石等の現状保存を図ることにした。最終的には9月3日まで調査を継続し、その後、9月9日と11月22日に仮設管の撤去時の立会調査を実施して終了した。以下、調査日誌を抄録することで調査の方法と経過にかかる。

調査日誌

8月18日（水） 晴 仮設管敷設のため4か所を掘削する。西側からLoc.1～4（以下「L1」「L4」などと略す）と呼称する。L1～3は、いずれも0.1～0.2m程度と掘削深度の浅いもので、現代の造成土あるいは攪乱された層序内におさまった。L4では現地表面から0.1mの深度で黄褐色砂礫層が確認され、その上面で淡黒褐色土層の広がりを確認した。

8月19日（木） 昨日よりも北側に仮設管設置のため4か所の掘削を実施した。同様に西からL5～8とする。L5では現代の造成土直下で黄橙色砂礫混シルト層（以下「地山」とする）が確認できだが、遺構・遺物とも皆無であった。極めて純粹な地山が確認され、削平を受けていると考えられた。L6～8は現在の道路の脇に掘削したもので、いずれも道路建設時に攪乱されている層序の中におさまった。

8月20日（金） 工事の都合により、掘削作業は実施せず。

8月23日（月） 本日から本管の掘削工事に着手する。ちょうど金堂南面を東西に横断する場所から着手し、これを1トレンチとした。0.1mの現代の攪乱層の下に0.2～0.5mの淡褐色砂質土層があり、北から南に向かって傾斜して堆積していた。その下位は地山となる。淡褐色砂質土層内には奈良時代の瓦が含まれ、特に毛原廃寺跡の説明看板が立ててある辺りでの出土が目立った。また、ほぼ同時併行で1トレンチの東側の民家の前庭内を東西方向に掘削した。これを2トレンチとする。現地表面から0.1mで地山が確認され、ほぼ南北方向の溝とやや西へ方位がぶれた2条の溝が検出された。金堂と民家の傾斜の変換点付近から軒丸瓦が1点出土した。出土層位は1トレンチから続く淡褐色砂質土だと判断される。2トレンチは、当初もっと深くまで掘削する予定であったが、遺構が確認されたため現地表面から0.3～0.4mまでの掘削にとどめ、一部保護を図ることができた。平板にて遺構平面の略測図を作成。その後、金堂より一段低くなっている南側の民家側に移動し、東西方向の掘削を開始した。これを3トレンチとする。3トレンチは深さ0.5mほど掘削した。西側半分は現在の耕作土内におさまり、数点の瓦が出土したものの特に問題なかった。また、東側半分では耕作土の直下で地山が確認され、削平が進んでいることが確認された。

8月24日（火） 金堂北東側の民家から村道に向かって掘削したトレンチで、これを4トレンチとした。深さ0.5mを掘削し、0.1～0.3mの現代の造成土の下に0.2m前後の炭混じりの暗黒褐色砂礫層が確認できた。中世以前まで遡る可能性のある整地層と推定できる。砥石と鉄滓が出土した。その下層が地山であるが、遺構は検出できなかった。同時に、金堂北西側の民家の前庭から南北方向にも掘削を行った。これを5トレンチとする。5トレンチ北側では現代の造成土が0.1m程度ある

のみで、直ちに地山が確認された。削平されているよう、遺構や遺物は確認できなかった。南側では民家への進入路を作った際の盛土が0.5m以上確認され、遺物は一切出土しなかった。昨日、終了した1トレンチの西端から、さらに西側へ1トレンチを延長する。これを1トレンチ西側として金堂前のトレンチとは区別して遺物を取りあげた。金堂西端の傾斜付近で軒平瓦1点が出土した。

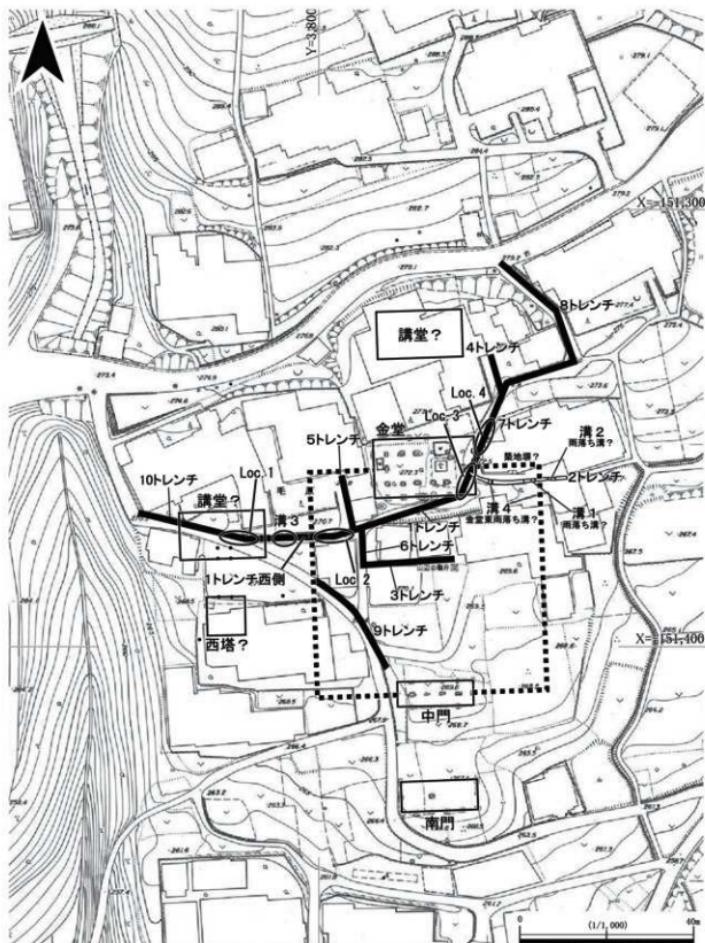


図9 トレンチ配置図

また、隣接する倉庫前において、近年に開削された南北方向の石組みの水路があり、著しく攪乱を受けていることを確認した。ただし、この攪乱の中からは比較的まとまった量の瓦が出土している。

8月25日（水）晴 1トレンチ西側をさらに西へと延長する。中ほどで奈良時代の瓦のみを含む南北方向の溝（自然流路か）を確認する。次いで、金堂隣接の倉庫前から南に向かう道路内に南北方向のトレンチを掘削する（6トレンチ）。0.5m程度掘削したが、北側では現地表面直下で地山を確認し、南側は道路の造成土内におさまった。さらに、本来礎石があったはずの位置から村道に向けて南西から北東方向にのびるトレンチ（7トレンチ）を掘削した。現地表面から0.3～0.4mは道路建設による攪乱を受けていたが、その下位に黄褐色土の広がりを確認できた。この層序は道路の建設時に周囲の地山を切って盛土したものと考えられた。おそらく、その際に礎石の据え付け痕等を壊してしまっているのであろう。この日は7トレンチの途中まで終了する。

8月26日（木）晴 7トレンチ掘削継続。金堂の北東隅で未知の礎石（礎石28）を確認する。すぐに奈良県教育委員会文化財保存課に電話連絡し、7トレンチの掘削を一時中断する。その間に現在の生活道路から丘陵上部の県道に向けての8トレンチの調査を進めた。全て道路作成時の造成土あるいは地山が確認され、一切遺構が残っていないことを確認する。新発見の礎石は他の礎石とは軸線がのらず、やや西側にずれた位置にあることを確認する。また、円形柱座の高さも約20cm低いことを確認し、原位置を保っていないことが明らかとなる。また、礎石の下の埋土は地山に近似する黄褐色砂疊層や黒色砂疊層を巻きしめたような層序があり、金堂基壇の造成土だと判断した。つまり、明確ではないものの金堂において基礎地形があったものと推定できた。

8月27日（金）晴 奈良県教育委員会文化財保存課の寺澤薫（主査）、清水昭博（主査）、奈良県立橿原考古学研究所の松田真一（部長）、中井一夫（課長）が来跡、指導。新発見の礎石の記録を取り、予定されていた水道管は道路東側の石垣の方へ迂回させることとなる。レベル移動実施。金堂礎石のレベルは標高270m前後となる。

8月31日（火）晴 級石周辺の追加調査実施。礎石の平面図作成。周辺の平板図作成。

9月1日（水）曇 級石の検出。写真撮影。

9月3日（金） 7トレンチの礎石の北東から掘削を再開する。村道内の造成土内におさまるために問題なく終了する。本日にて、水道本管設置のための掘削作業を終了する。

9月9日（木） 既存の仮設水道管の撤去のため立合調査を実施する。中門の北西の道路脇に埋設していた仮設管の掘削を9トレンチとする。比較的多くの瓦が出土するものの、明確な遺構は確認できなかった。1トレンチ西側の西端辺りから北西方向にのびる道路脇に埋設していた仮設管の掘削を10トレンチとする。1トレンチ西側に近い地点で瓦が数点出土するものの、西へ離れるにつれて出土遺物がなくなっていた。遺構も確認できない。

11月22日（月） 3トレンチと6トレンチの間を一部掘削するため、立合調査を実施する。特に問題なし。本日にて、全ての掘削作業を終了する。（田部）

2. 整理等作業の経過

2004年度に出土した瓦等の整理作業については、2017年度後期に奈良大学文学部文化財学科の「考古学研究法」（担当教員：坂井秀弥）の授業において行った。この期間に洗浄・注記など基礎的な整理を行った。その後、2018年度・2019年度に坂井ゼミの有志で継続した。2018年度には奈良大学博物館において毛原廃寺の企画展「謎の大寺 奈良県山添村毛原廃寺跡—史跡保存の100年—」を開催した。以下、年度ごとに述べる。



2017年度 授業の初期の10月から大学の通信教育棟実習室において、6つの班に分かれて瓦の洗浄・注記を行った（図10）。一部の瓦については拓本を採った。

2018年度 企画展の展示図録作成を目的として、6月から翌年3月まで、前年度に考古学研究法を履修した学生を含む坂井ゼミの3・4回生有志5名（福垣・田中・滑川・野田・薄田）が、考古学実習室において瓦の分類や瓦の採拓、実測を行った。

6～7月 遺物全体の様相を把握しつつ実測等の個体を抽出するために分類を行った。

9～11月 分類により抽出した軒瓦9点、平瓦20点について拓本をとった。

12～1月 保存状況のよい軒瓦3点、平瓦2点、円筒状瓦製品（土管）1点の実測図を作成。

2月 実測図と拓本（図11）の図版とその説明文を作成した。

3月 企画展の展示作業を行い、11日に展示開始（5月17日まで）。

2019年度 4月から翌年3月に授業後の時間を利用し、考古学実習室で作業を行った。

4～5月 再度遺物の接合を行った。その結果、平瓦や丸瓦など10点ほどの個体が新たに接合した。

6月 前年度にとった拓本で難があるものについては拓本をとりなおした。

7～12月 軒瓦9点、丸瓦3点、平瓦20点、円筒状瓦製品3点の実測を行った。

1月 原寸大で一枚ずつ手描きでトレースした。

2月 報告書の本文を分担して作成し、遺物の写真撮影と図版のレイアウトを行った。

3月 全体のレイアウトを行い、出稿する。（福垣）



図10 2017年度の整理作業(奈良大学)



図11 2018年度の整理作業(奈良大学)



V. 調査の成果

1. 層序（図14）

現在の民家あるいは村道に係る造成土の直下で黄橙色砂礫混シルト層の地山が確認されおり、この間に堆積層が確認できたのは1トレンチ西側の暗黒褐色シルト層が0.2mと4トレンチの炭混じりの暗黒褐色砂礫層0.2mのみであった。1トレンチ西側の暗黒褐色シルト層はそれほど古い堆積ではない可能性が高く、基本的に最近の造成土等の直下で地山が検出されているというのが基本的な層序である。また、少ないながらも確認された遺構は、全て地山の上面で検出されている。

なお、10ヶ所のトレンチのあり方を総合すると、当地は北から南へ緩やかに傾斜した緩斜面であることがはっきりしており、宅地などの造成のために、北側の高い方を切り土して平坦面を作り出していることが分かった。このような行為は、古代の寺院造成時であっても同様であったと推定され、宅地や生活道路等の造成によって、遺構が消滅した可能性もある。ただし、今回の調査によって周間に遺構が広がっていることが明らかにされた点は非常に大きな成果であった。（田部）

2. 遺構

遺構を確認できたのは、1トレンチと1トレンチ西側、2トレンチ、7トレンチの4ヶ所のみであった。最大の成果は7トレンチにおける礎石の新発見である。この他、金堂部分において基礎地盤と推定できる痕跡を確認した他、4条の溝を検出した。なお、1及び2トレンチで溝と判断した遺構は、トレンチ幅が0.6mと狭いため大型の土坑である可能性も否定できない。

礎石28(図12・13) 金堂の内部から北東方向へ掘削した7トレンチで、新に礎石が1つ確認された。この礎石が発見されたことによって、立合調査から本発掘調査へと変更している。

礎石は、平面で約1×1.2mと大きく、中央に円形の柱座をもち、両端に直線状の地覆座をもつ。毛原庵寺跡の金堂には地覆座の裾に掘り込みを持つ形態の礎石が知られているが、そのような掘り込みはない。また、礎石の上面を確認したのみで確実ではないが、周間に礎石の据え付けの痕跡は確認できなかった。

この礎石は、金堂の北東隅と想定される礎石の地覆座の軸よりもやや西へずれていること、円形柱座のレベルも他の金堂の礎石より約20cm低いこと等から勘案して、原位置は保っていないと判断できる。おそらく、過去のなんらかの造成の際に邪魔になり、本来あった位置の南あるいは、標高の低い西側に穴を掘り、そこへ落とし込んだのであろう。



図12 磚石2・28出土状況

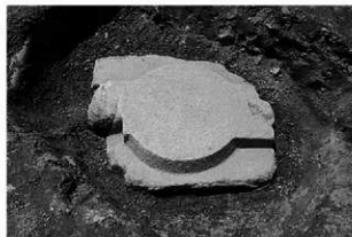


図13 磚石28

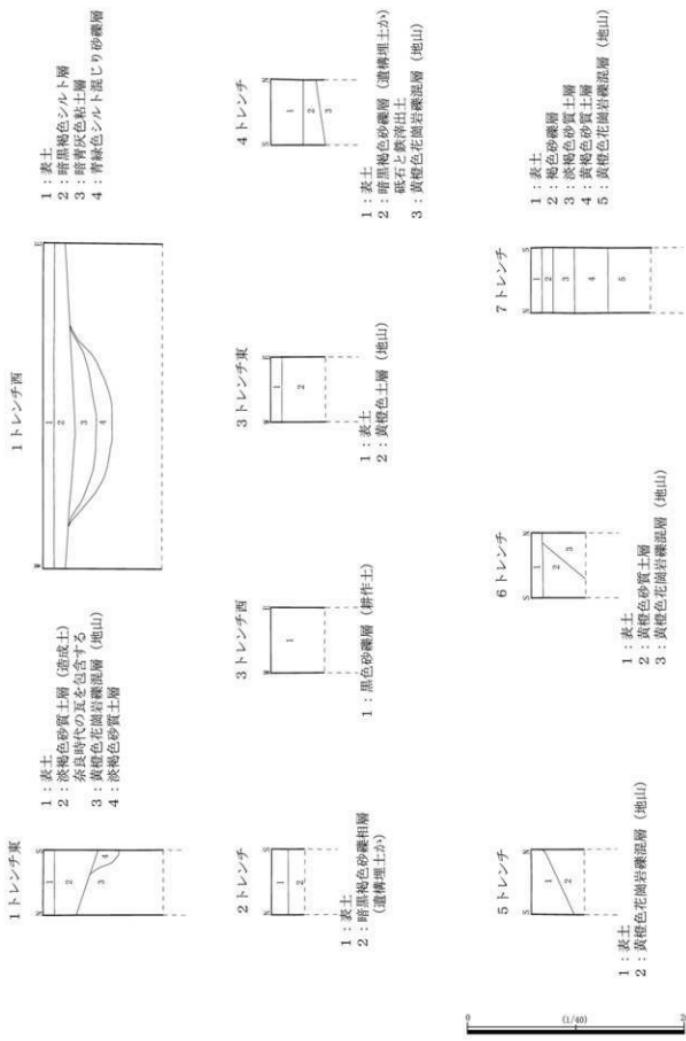


図14 土層柱状図 ($S = 1/40$)

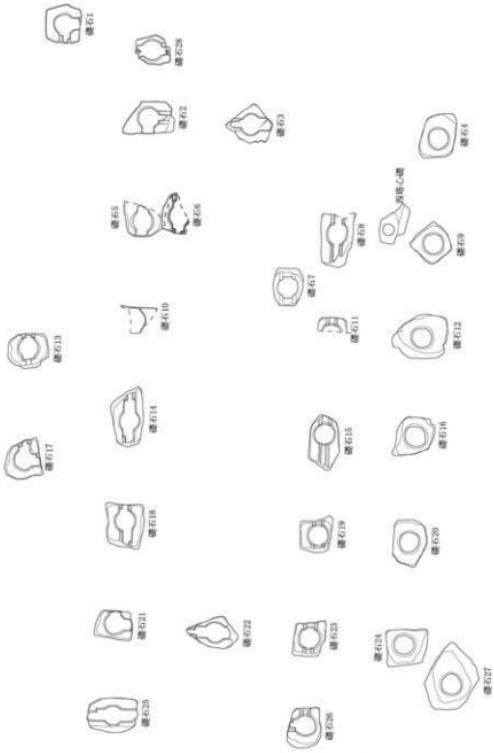


図15 金堂礎石配置図 (S = 1 / 150)



なお、新発見の礎石から1列内側の本来礎石のあったはずの場所も掘削したが、現在利用されている道路の造成により搅乱され上部構造は一切残されていないことも判明した。

金堂基礎地形 主に7トレンチで確認した礎石の南西（内側）で確認している。現地表面から0.3~0.4mまでは道路作成時に搅乱されているが、その搅乱の下位で地山に近似する黄褐色砂礫層が広がっていること、さらにその下部に叩きしめられたような痕跡のある黒色層を確認した。また、

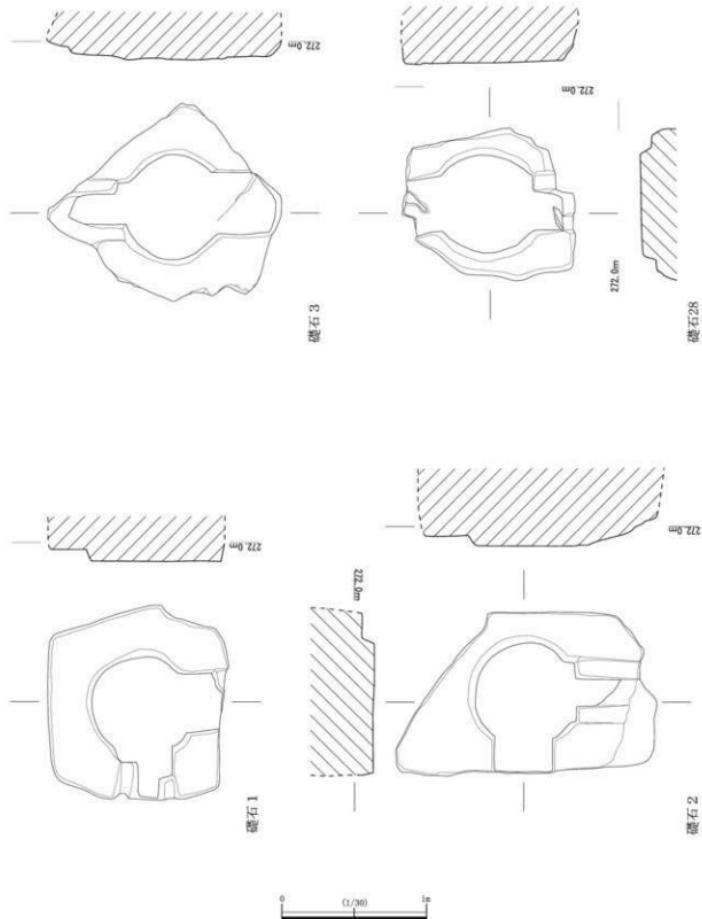


図16 金堂礎石1・2・3・28平面・断面図(S = 1/30)



LAでも黄褐色と黒色土層の広がりを確認している。実際に立合した際には、黄褐色の地山に黒色の遺構があるのではと推測したが、7トレンチの状況を勘案すると黄褐色の層序は地山でなく、いずれも金堂基礎の造成土だと考えられる。これらのことから、部分的な調査のため断定できないものの、金堂の築造に当たって基礎地形が行われている可能性が考えられる。なお、金堂の前面を東西方向に掘削した1トレンチでは、基礎地形を推測させるような版築状の積み上げは確認できなかった。位置からは基礎地形が確認されてもよいはずであるが、その範囲からやや南へ外れていたのかもしれない。一方、現在毛原廃寺跡の説明看板がある辺りの地山と現地表面の間にある淡褐色砂質土層から、瓦が比較的まとまって出土している。この淡褐色砂質土層の性格を特定しきれなかつたが、何らかの別の遺構や包含層のようなもののが存在した可能性も考えられる。

溝1・2 金堂の東側の2トレンチで、トレンチに直交するように2条の溝を確認した。トレンチ西側の溝を溝1とする。ほぼ正方位であり、金堂等の伽藍配置の軸と一致するように見える。また、東側で検出した溝を溝2とする。溝2は北西から南東方向へのびるもので、現状では伽藍配置とは異なる方位を示すと理解した。これが当初より異なる方位だったのか、護岸を抜き取った際もしくは素掘りであったため溝肩が削れたのかは、トレンチ幅が狭く判断は難しい。ともに現地表面から0.1~0.2m程度の地山上面で確認できた。2トレンチは当初0.5mまで掘削する予定であったが、溝2条が確認されたため、掘削は0.3~0.4mまでに変更し、遺構は保存することにした。ほぼ検出作業のみであったので、溝に伴う遺物は出土していない。

溝1・2は推定回廊の位置にある。毛原廃寺の礎石は1間3.3m程であるが、溝1・2の間は3mほどしかなく礎石を想定することは難しい。溝1・2が金堂と中門をつなぐ区画施設の雨落ち溝とすると、その区画施設は回廊ではなく築地塀もしくは掘立柱塀であった可能性も考える必要もある。

溝4 2トレンチ西側で、南北方向の溝を1条確認した。ほぼ正方位であり、金堂等の伽藍配置の軸と一致するように見える。確認された位置から考えて金堂東側の雨落ち溝の可能性がある。

溝3 1トレンチ西側で、南北方向の溝を1条確認した。現地表の0.1m下に、暗黒褐色シルト層が0.2mあり、その下位の黄色橙色砂礫層（地山）上面で検出した。埋土は2層で構成され、上層が暗青灰色粘土層（0.2m）、下層が青緑色シルト混砂礫層（0.1m）となる。重機で掘削してしまったため確実なことは言えないが、この辺りで奈良時代の瓦のみが出土していることから、この部分について溝3と判断した。なお、埋土の特徴から、流路のような性格が推測できる。（田部）



図17 2トレンチ調査状況



図18 1トレンチ西側調査状況



V. 遺 物

1. 瓦類

(1) 軒丸瓦 (図19-1~4、図版1~3、8)

軒丸瓦は全部で6点出土している。ここでは比較的残りの良い4点を報告する。なお1~4は、平城宮6282型式に類似しているKA種(図26)の複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。

1は、内区が2重の界線で区画されており、珠文の数が1+8である。瓦当裏面には、接合のための溝を作る(図版8-1)。胎土は粗く、1mm大の長石と思われる白色砂粒が多数含まれており黃灰色である。1トレンチ暗黒褐色シルト層出土。

2は、中房と弁区の界線が梢円形になっており、全体も同様に歪んでいる。この歪みは、焼成時にできた歪みと推定される。瓦当部と丸瓦の接合部は剥離しており、1と同様の接合方法が見られる。また、厚さ約1.5cmの瓦当裏面に丸瓦を直角に当て粘土を2回ほど足すことで3.5cmほどの厚さに整えたと推定される(図版8-2)。7トレンチ出土。

3は、瓦当裏面に不定方向のナデを施す。胎土は緻密で、1mm大の長石と思われる白色砂粒が多數含まれており、青灰色で焼成は硬質である(図版8-3)。1トレンチ暗黒褐色層シルト層出土。

4は、胎土がやや緻密である。全般的に摩耗が激しく、瓦当裏面はナデを施す部分もある。色調は灰色であり、焼成はやや甘い。7トレンチ出土。(滑川)

(2) 軒平瓦 (図19-5~9、図版2・3)

軒平瓦は全部で9点出土しており、ここでは5点報告する。5~8は平城宮6689型式に類似しているKC1種の均整唐草文軒平瓦であり、頸は段頸である。5~8をA類、9はB類と分ける。

A類(5~8) 5は、胎土が緻密で焼成は硬く、青灰色を呈する。平瓦の凸面が縦方向に繩タタキが施されており、頸部と平瓦接合部はナデを施す。平瓦の凹面はケズリを施す。2トレンチ出土。

それに對して6は、胎土がやや粗く1~2mmの長石と思われる砂粒を含む。全般的に摩耗や剥離が激しく茶褐色を呈する。頸部は粘土板を貼り付けて成形する貼付段頸で横方向のナデが確認できる。高さは約6cmほどである。1トレンチ出土。

7の瓦当面は大部分が剥離しており、上隅の珠文がわずかに残る。色調は灰色だが所々茶褐色となる。黒色砂粒を多く含み、凹面部分はスリ消す。1トレンチ暗青灰色粘土層出土。

8は、瓦当文様がシャープで深いが、平瓦部分は剥離している。1mm大の長石を多く含み焼成は良好、色調は灰色。7トレンチ出土。

B類(9) 9は、表面が暗灰色でその他の灰色である。焼成は良好で緻密な胎土で1mm大の白色砂粒を含む。文様から奈良時代よりも新しいと考えられる。1トレンチ出土。(滑川)

(3) 丸瓦 (図19-10~12、図版7・8)

丸瓦はほとんど小破片である。比較的残りのよい3点について報告する。

10は残存長7.8cm、幅10.8cm、厚さ2.1cm。凸面はナデを施す。凹面は布目痕跡が見られる。側面にケズリを施し、凹面の縁辺にもケズリを施す(図版8-4)。広端面はナデを施す。胎土はやや粗く、1~2mm大の長石と思われる白色砂粒を含む。焼成は硬質、色調は暗褐色となる。7トレンチ出土。

11(図版7-8)は残存長7.4cm、幅10.7cm、厚さ3.2cm、玉縁長0.5cm。凸面はナデを施す。肩部には粘土貼り付け痕が見られる。凹面は布の綴じ合せ痕跡が残る。玉縁部と胴部の連結面はナデを

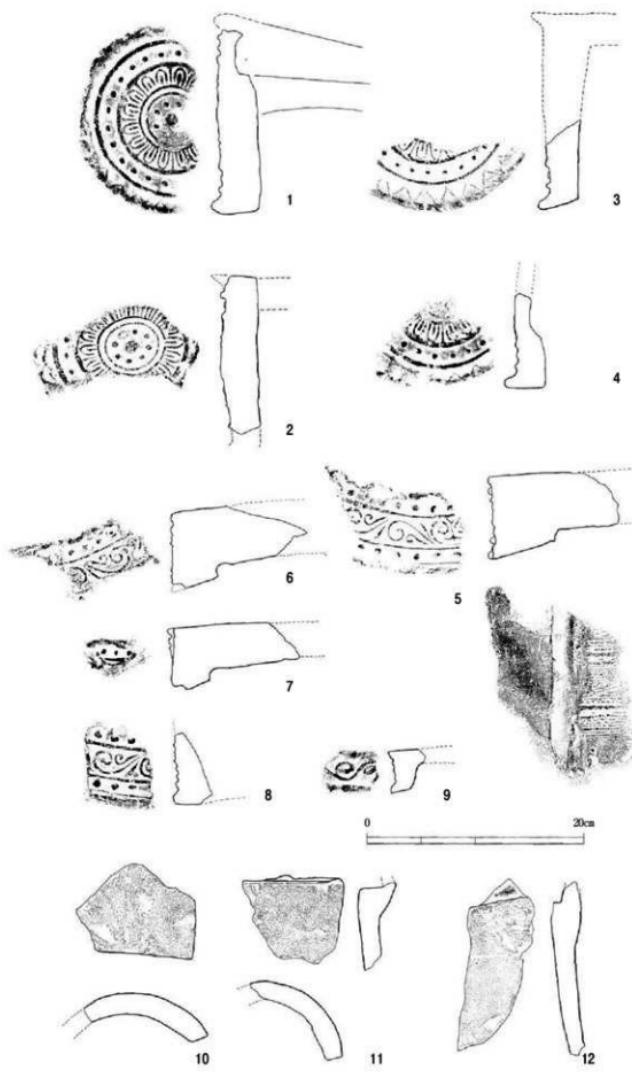


図19 軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦 ($S = 1/4$)



施す。胎土は、やや粗く1~2mmの大の長石と思われる白色砂粒を含む。焼成は硬質、色調は凸面側が暗褐色、凹面側が茶褐色となる。1トレンチ青緑色シルト混じり砂疊層出土。

12は残存長15.9cm、幅6.0cm、厚さ1.7cm、玉縁部1.6cm。凸面はナデを施す。凹面は布目痕跡が見られる。肩部には、粘土貼り付け痕が見られる。また、縱方向に粘土板を貼り合わせた痕跡が確認できる。連結面はナデを施す。胎土は緻密であり、焼成は軟質。色調は凸面側が白色であり、凹面側が明灰色となる。1トレンチ出土。(川崎)

(4) 平瓦(図20~22、図版4~6、8~9)

全体でコンテナ約10箱出土している。大半が破片であり、完形に復元できるものではなく、ある程度の大きさのものもきわめて少ない。そのため、側面または端面が合わせて2面以上残存しているものと、遺存状態が比較的よいものを報告する。遺存状況がよくないこともあり、製作技法には捕巻作りと一枚作りが混在することはわかるものの、いずれかが明確に判別できるものはわずかであった。そのため分類にあたっては、凹面・凸面の調整の違いを分類の基準とした。なお、法量はすべて残存値である。

凸面調整の特徴から、A類・B類に分類する。

- ・A類：縄タタキ（以下「タタキ目」とする）が側面に対し斜行するもの
- ・B類：タタキ目が側面に対し平行なもの

凹面の調整の特徴から1類・2類・3類に分類する。B1類は該当するものがない。

- ・1類：全面にナデを施し布目痕跡が残存しないもの
- ・2類：側面・端面の縁辺部にケズリを施し、それ以外には布目痕跡が残存するもの
- ・3類：全面にケズリを施すもの

A・B類の側面は、凸面側に幅広いケズリにより面を作り、さらに凹面側にケズリにより面取りを施すものが大半である。凸面側と側面がつくる角度は、A類とB類(図版7-6・7・9)ともに鈍角であるが、A類の方がB類に対して開きが大きい傾向がみられる。

A1類(図20-13~19)

13~19は凸面のタタキ目が側面に対し斜行し、凹面全面に縦方向のケズリを施すものである。

13は、全長28cm、狭端幅14.8cm、厚さ2.1cm。ごく一部ではあるが両側面が遺存する唯一の資料である。タタキ板の幅は約3cmで、様々な方向のタタキ目が見られ、一部をナデ消す。凸面には凹型整形台と推定される痕跡とそれに直行する二条の圧痕がみられる(図版9-2)。凹面は狭端側に横方向のケズリ後縦方向のケズリを施す(図版9-7)。一部に工具の痕跡と布目痕跡が残存する。灰白色で焼成は硬質。1トレンチ溝3暗青灰色粘土層出土。

14は、全長18.5cm、狭端幅17.5cm、厚さ2.6cm。タタキ板の幅は約5cmで、凸面の狭端から幅約8cmのナデを施しタタキ目を消す(図版8-6)。暗灰色で焼成は硬質。10トレンチ出土。

15は、全長8.5cm、狭端幅13.1cm、厚さ1.9cm。タタキ板の幅は約5cmである。凸面の一部を幅約5cmのナデを施しタタキ目を消す。凹面は、狭端面側に横方向のケズリ後縦方向のケズリを施す。凹面には凹型整形台の痕跡がみられる。明灰色で焼成は硬質。1トレンチ出土。

16は、全長10cm、幅8.5cm、厚さ1.9cm。暗灰色で焼成は軟質。9トレンチ出土。

17は、全長9.4cm、幅7.5cm、厚さ1.6cm。凹面は、一部に布目痕跡が残存する。側面は、凹凸面側をケズリにより幅広く削った後、側面中央にケズリを施し、3面の面取りを施す。青灰色で焼成は硬質。1トレンチ溝3暗青灰色粘土層出土。

18は、全長9cm、狭端幅9.6cm、厚さ1.7cm。凸面は、タタキ目をナデ消す。青灰色で焼成は硬質。

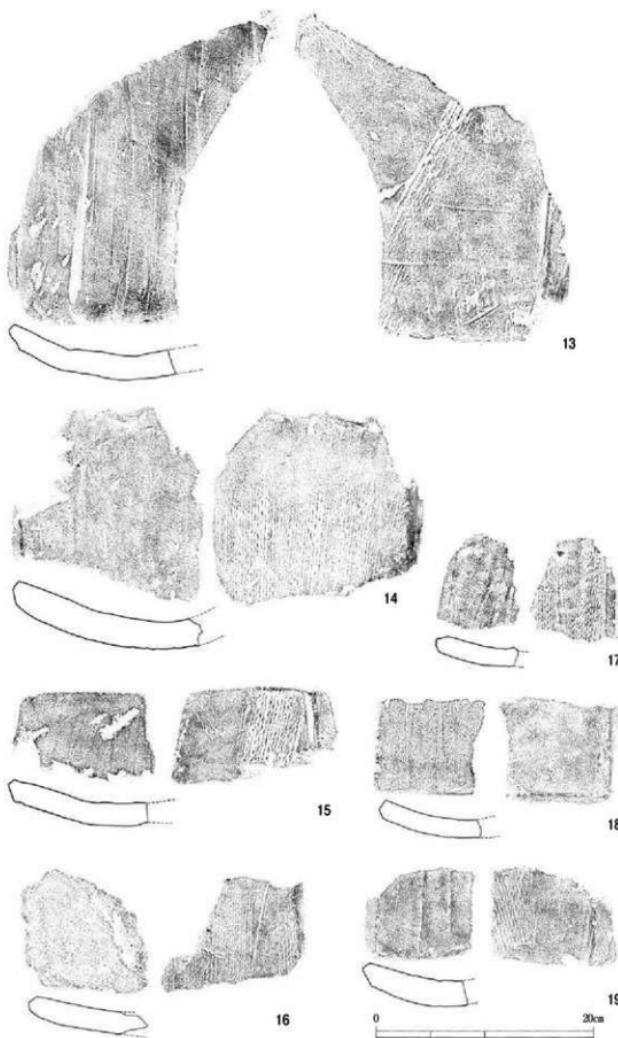


図20 平瓦(A1類)(S = 1 / 4)

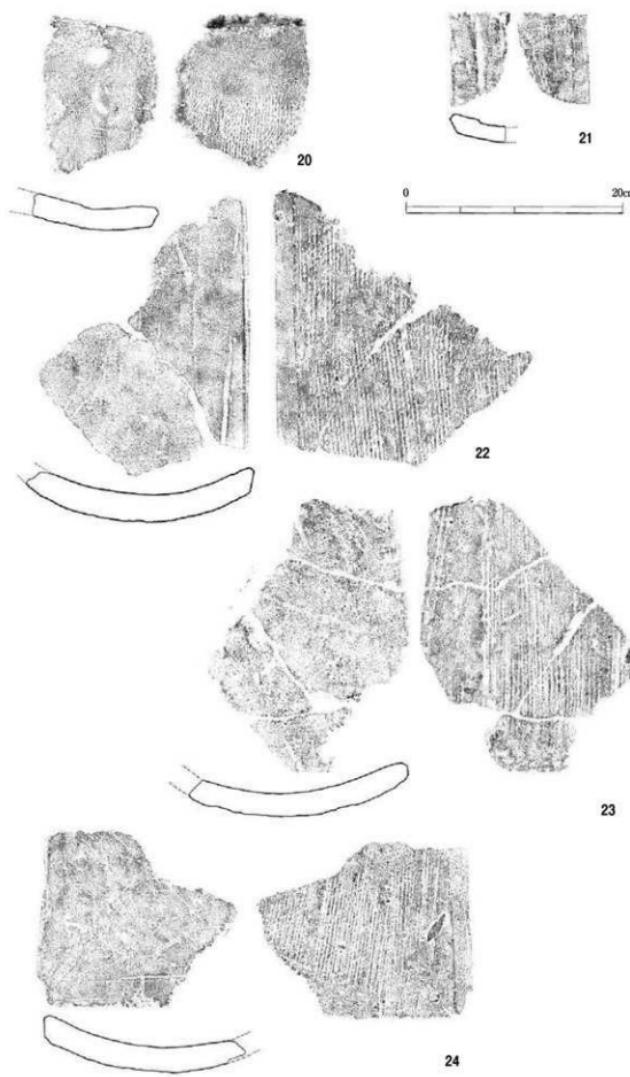


図21 平瓦(A2類・B2類)(S=1/4)



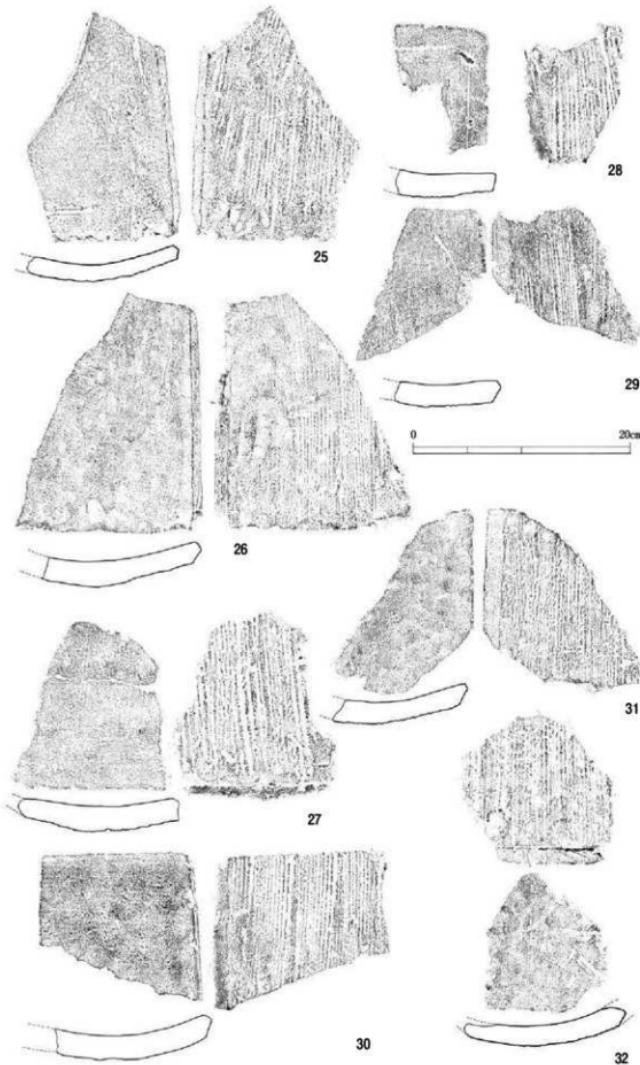


図22 平瓦(B2類・B3類)(S = 1/4)



1 トレンチ暗黒褐色シルト層出土。

19は全長8.4cm、広端幅10.1cm、厚さ2.4cm。凸面は、幅約5cmナデを施しタタキ目を消す。凸面には凹型整形台の痕跡がみられる（図版8-8）。凹面は、縦方向のケズリを施すが、一部に布目痕跡が残存する（図版8-7）。側面は、凹凸両側縁に面取りを施し剣先状となった側面を17とは異なり広端側のみ追加の面取りを施す。灰色で焼成は硬質。1 トレンチ出土。

A2類（図21-20・21）

20・21は、凸面のタタキ目が側面に対し斜行し、凹面側面・端面側の四方にケズリを施しそれ以外には布目痕跡が残存する。

20は、全長13cm、狭端幅9.9cm、厚さ1.9cm。凸面の狭端から幅約6cmのナデを施しタタキ目を消す。凹面は四方に幅約1.5cmのケズリを施す。暗灰色で焼成は硬質。10トレンチ出土。

21は、全長8.5cm、狭端幅5.2cm、厚さ1.4cm。凸面の狭端側から側面側にかけて幅約4cmのナデを施しタタキ目をナデ消す。凹面は四方に幅約1.5cmのケズリを施し、側板痕が残存する。明灰色で焼成は硬質。1 トレンチ暗黒褐色シルト層出土。

B2類（図21-22～24、図22-25～29）

22～29は凸面のタタキ目が側面に対して平行で、凹面側面・端面側の四方にケズリを施しそれ以外には布目痕跡が残存するものである。

22は、全長24cm、幅20.8cm、厚さ2.3cm。タタキ板の幅は約3.5cmである。凸面は一部、指押さえによってタタキ目が消されている。暗青灰色で焼成は硬質。9 トレンチ出土。

23は、全長25cm、幅19.7cm、厚さ2.3cm。タタキ板の幅は約5cmである。凹面側面・端面側の四方に施されるケズリは摩耗しており確認が困難であるが、中央部は未調整で布目痕跡が残っている。灰白色で焼成は軟質。10トレンチ出土。

24は、全長16.2cm、広端幅17cm、厚さ2.1cm。タタキ板の幅は約3cmである。凸面には離れ砂を用いている。暗灰色で焼成は硬質。7 トレンチ黒色砂質土層出土。

25は、全長21.5cm、広端幅14.8cm、厚さ1.3cm。タタキ板の幅は約4cmである。凸面は一部、指押さえによってタタキ目が消されている。また、離れ砂を用いる（図版7-2）。暗灰色に一部、黃灰色が混じり焼成は硬質。1 トレンチ出土。

26は、全長21.5cm、幅13.7cm、厚さ2.1cm。タタキ板の幅約3.5cmである。凸面は一部、指押さえによってタタキ目が消されている。また、離れ砂を用いる。暗灰色で焼成は硬質。1 トレンチ出土。

27は、全長15.6cm、厚さ2.2cm。タタキ板の幅約5.5cmである。凸面のタタキ目は他と比べ粗い（図版9-5）。暗灰色で焼成は硬質。1 トレンチ出土。

28は、全長12cm、広端幅8cm、厚さ1.9cm。タタキ板の幅は3.5cmである。凸面は一部、指押さえによってタタキ目が消されている。側面は、凹凸側のみ面取りを施す。他の個体と比べ平滑なため道具瓦の可能性がある。色調は暗灰色で焼成は硬質。出土地不明。

29は、全長13cm、幅7.5cm、厚さ2cm。タタキ板の幅約4cmである。灰色で焼成は硬質。7 トレンチ黒色砂質土層出土。

B3類（図22-30～32）

30～32は凸面のタタキ目が側面に対して平行で、凹面全面にナデを施し布目痕が残存しない。

30は、全長14cm、狭端幅14.5cm、厚さ1.9cm。タタキ板の幅は約4cmである。また、離れ砂を用いる。灰色で焼成は硬質。1 トレンチ暗黒褐色シルト層出土。

31は、全長16cm、幅12.6cm、厚さ1.8cm。暗青灰色で焼成は軟質。1 トレンチ暗黒褐色シルト層





出土。

32は、全長12.1cm、厚さ1.7cm。凸面には離れ砂を用いる。暗灰色で焼成は硬質。出土地不明。

小結

ここでの分類は、遺存状況がよくないものもあって、桶巻作り・一枚作りの分類ではなく、凸面のタタキ目の方向からA類とB類に分けた。A類の斜行するタタキ目は桶巻作りに見られる叩き締め円弧と想定することもできる。A類の凹面には側板痕とみられる段がある傾向があり、側面は凹面に対して直角の面をもつ。これには凹面の全面にケズリを施す1類が多い。一方、B類の平行するタタキ目は一枚作りの可能性がある。これには凹面の縁辺にケズリを施す2類が多い傾向がうかがえる。ここでみられる特徴は、供給先である岩屋瓦窯の様相とはほぼ同じである。

今回の調査では平瓦と丸瓦が合わせて106.71kgが出土した。このうち平瓦は98.24kg(92%)に対して、丸瓦は8.47kg(8%)と極端に少ない。出土量をトレンチごとにみると、金堂の南面から東にかかる部分に位置する1トレンチと7トレンチから約7割が出土している(図23)。また、金堂の南西側にあたる9トレンチと西側にあたる10トレンチからも、比較的まとまって出土しており、その周辺に何らかの施設が想定される。(稻垣・田中)

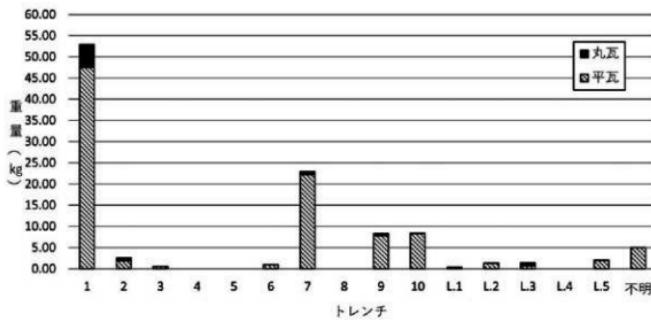


図23 丸瓦・平瓦のトレンチ出土状況(重量)



2. 円筒状瓦製品（図24、図版1・10）

円筒状を呈する形状と褐色の付着物から、地中に埋設する土管の可能性があるが、差し込んで連結できるほど両端の径には差がなく、瓦の玉縁に類した受け部がみられない。土管ではない可能性もあるので、ここでは「円筒状瓦製品」とする。円筒状瓦製品は、金堂南側を東西にかけて掘削した1トレンチから3個体以上出土した。

33は全長約23.2cm、広端部直径約11.7cm、狭端部直径約11.4cm、厚さ約1.2~1.4cmで、円筒形に近い形態を呈する。胎土は緻密、焼成は硬質で暗青灰色である。内面に布目痕跡が見られ、広端部内面の端部は無調整である。35と同様、内面約4.5cm、外面約9cmの対応する範囲に褐色の付着物が見られる。横に寝せて埋設した可能性が窺える。1トレンチ出土。

34は全長約23.4cm、広端部直径約12.4cm、狭端部直径約11.3cm、厚さ約0.9~1.2cmで、2と同様に円筒形に近い形態である。胎土は緻密であり、焼成は硬質で暗青灰色を呈する。受け部内面の端部は無調整でつくりがやや粗い。内面には布目痕跡があり、外面は焼成時のものと思われる白灰色の継筋が残っている33と同様に1トレンチ出土。（藤田・野田）

35は残存長約16cm、広端部残存直径約14.5cm、狭端部直径約12.4cm、厚さ約1.4~1.6cm。約0.3~0.4cm前後の長石などを含んでおり、胎土は緻密、焼成は硬質で青灰色である。内面には継方向のヘラケズリ調整、布目痕跡が見られる。受け部内面の端部は、調整が施されていないため仕上げが粗い。また、内面に幅9cm前後の帯状の範囲に鉄分と推定される褐色の付着物が見られ、それと対応する外面には約0.1cm前後の粗い砂粒が付着している。このことから、横に寝せて埋設して使用された可能性が窺える。1トレンチ西側出土。（藤田・野田）

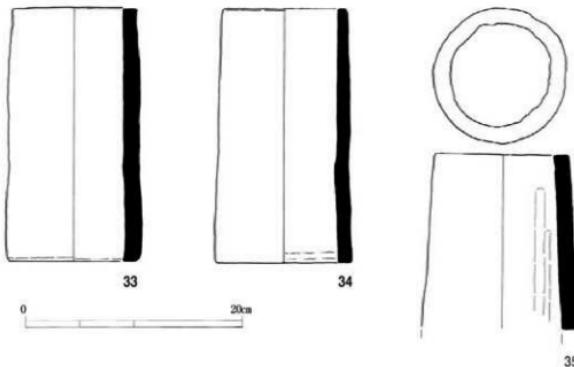


図24 円筒状瓦製品(S = 1/4)



3. 土器・陶磁器（図25）

近世の土器・陶磁器が数点出土している。36は瓦質土器の破片で、内面に櫛目がわずかに認められることから擂鉢と考えられる。37は擂鉢の破片で内面に縦方向で4条1単位の櫛目を施している。色調は赤褐色を呈し、外面に釉がかかっている。38は近世陶器の破片で内面に乳白色や黄白色の釉が付着し、高台が確認できる。39は湯飲み茶碗とおもわれる磁器の破片で、青磁色を呈し、見込み部の中央に文様を施す。40はコバルト色の染付が施された磁器片で、底部しか残存していないものの、器種は大型の皿又は鉢と考えられる。36・37・40が1トレンチ暗黒褐色シルト層出土、38が2トレンチ出土、39がL4から出土している。（稲垣）

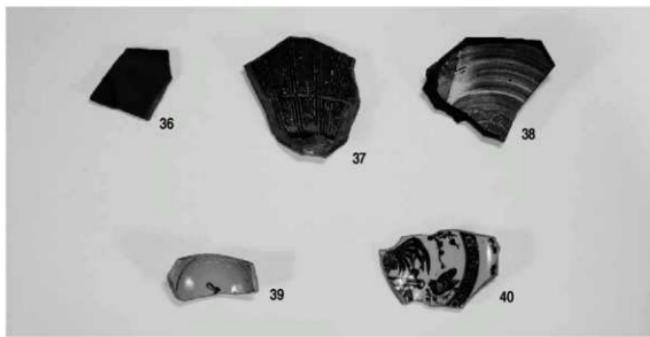


図25 土器・陶磁器



VII. 特論 毛原廃寺の創建時期と廃絶時期について

はじめに

毛原廃寺は、奈良県山辺郡山添村大字毛原に位置する古代寺院である。その存在については、古くから知られており、「大和志料」によると地元では「柿本人丸（人麻呂）が建立した大仏殿跡」との伝承があったらしい。後ほど創建時期については言及するが、創建は奈良時代前半である可能性が高く、柿本人丸との関連性は薄い。一方、廃絶時期についても後述するが、奈良時代後半と考えられ平安時代を待たずに廃絶したと考えられる。

毛原廃寺は、大和国東部山間にある寺院にしては伽藍の規模が大きく、一氏族が創建した寺院とは考えにくい。そのため、東大寺板鰐柱との関連性や、聖武朝の仏教政策に関わる寺院であるとの解釈がなされてきた。

本稿では、改めて毛原廃寺の創建と廃絶時期について再検討を行い、毛原廃寺の性格について再考していきたい。

1. 毛原廃寺の創建時期について（図26）

毛原廃寺は、史料からその創建時期を知ることができるものがいない。また、出土した土器は小片が多く、土器からも創建時期を検討することは難しい。それゆえ、採集品や出土品で多く確認されている瓦から創建時期について言及されてきた経緯がある。特に、森川桜男氏・山田猛氏や松田真一氏などの研究が現状の年代観を示しているといえる（森川他1980、松田他1991）。まずは現状の年代観についてまとめ、その後新たな年代観を述べていきたい。

（1）現状の年代観

毛原廃寺出土の瓦については、松田真一氏がその研究の中で、軒丸瓦 KA 種・KB 種、軒平瓦 KC1 種・KC2 種（以下、KA・KB・KC1・KC2.）に型式分類している（松田他1991）。本稿ではこの型式分類を使用する。KA は平城宮6282・6284型式、KB は平城宮6304型式、KC は平城宮6689 型式（以下、平城宮及び型式を省略。）と似た文様であるが、同じ範で生産されたものではない。

また、閔永貞氏の論文内に嘉永安政の奈良の住人橋本某が作成した軒丸瓦拓本が掲載されている（閔永1902）。この拓本はいわゆる東大寺式軒丸瓦と考えられるが、採集品や発掘調査で出土したものにこれと同じものは確認されていない。毛原廃寺近隣では伊賀市三田廃寺から東大寺式軒瓦が出土しているが、毛原廃寺において、東大寺式軒丸瓦が本当に使用されたかが明確でないためこれについては本稿では取り扱わない。

軒平瓦（KC1・KC2、6689）

6689は A ~ C 種があり、文様などから A → B → C の順に生産された。KC1は6689A に比べて唐草文の巻きが強いという古い特徴があることから、6689A に先行すると考えられた。また、KC2 は唐草文の巻きが弱く右第三単位主葉が折れ曲がる特徴があり、6689A に近い文様となることから KC1 に後出すると考えられた。そのため、KC1→KC2→6689A→6689B→6689C の順に生産されたと考えられてきた。

瓦の年代は平城宮の瓦との比較で検討されている。平城宮第二次内裏、松林苑などから出土した軒平瓦6689A・6664D・6664Fには同筆の「東」の文字が線刻されているため、同時期の同一工房で生産された瓦である。6664F は、平城宮第二次内裏北方官衙土坑 SK2102 から天平元年（729）の

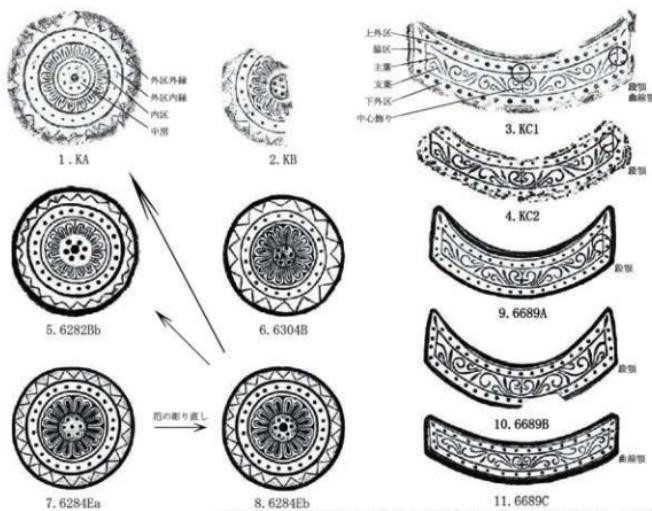


図26 毛原廐寺跡出土瓦・平城宮出土瓦 (S = 1 / 6)

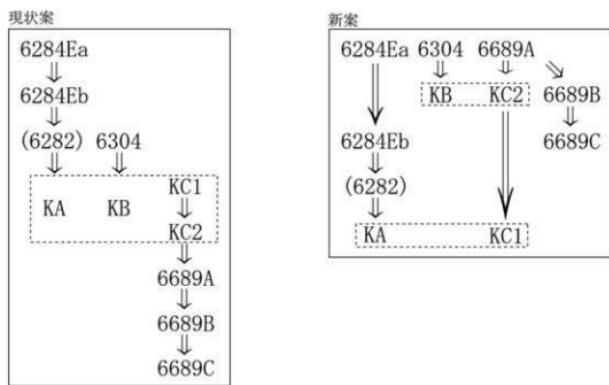


図27 毛原廐寺跡出土軒瓦変遷案



紀年銘木簡と共に伴するため、天平元年（729）には生産されていた瓦である。それゆえ、「東」の線刻が同筆である6689Aも天平元年（729）には生産されていた瓦といえる。そして、KCは6689Aよりも先行すると考えられたことから、天平元年（729）頃には生産されていた瓦とされた。

軒丸瓦（KB, 6304）

6304はA～E・G・L・N・O種があり、KBはB・C種に似る。6304は平城宮第二次内裏東外郭やその周辺から多量に出土しており、軒丸瓦6311Aとともに軒平瓦6664D・6664Fとセットで使用された。6311Aと6664Fは先述した土坑SK2102から出土しており、セットで使用された6304も同時期と考えることができる。KBは6304より後にする文様であるが文様の崩れが少ないと、6304と同じ天平元年（729）頃には生産された瓦と考えられている。

軒丸瓦（KA, 6282・6284）

6282は6284Eaの範を彫り直した6284Ebを祖型にして作られた瓦で、中房中央の蓮子が肥大する特徴がある。6282にはA～E・G～I・L種があり、A種以外は瓦当文様・製作技法が共通する。KAは6282Bbに似る。6282B～E・G・Iは二条大路SD5100から天平12年（740）の紀年銘木簡と共に伴するため、天平12年（740）には生産されていた瓦である。そのため、6282の年代観を援用するとKB・KCよりも年代が新しくなる。しかし、『薬師寺縁起』には「神亀2年（725）に昌福寺を建立した」との記載があり、これは三重県名張市夏見庵寺の修造を示していると考えられている。夏見庵寺ではKAとKCがセットで多量に出土しているが、KA・KC以外で奈良時代前半の瓦がないため、神亀2年（725）頃にはKA・KCが使用されたと考えられた。

（2）年代の再検討（図27）

以上のことから毛原庵寺出土軒瓦は、天平元年（729）頃に生産された瓦と位置付けられてきた。しかし、KCが6689Aの祖型になったということ、KAが平城宮の年代観と合わないことに違和感が残る。平城宮においては、6689Aよりも古い瓦で唐草の巻きが弱く右第三単位主葉が折れ曲がるKC2の特徴を持つ文様はすでに採用されている。そのため、唐草の巻きが強いKC1からKC2が模倣され、KC2から6689Aが模倣されたとは考えにくい。逆にKC2は6689Aに近似することから、6689AからKC2が模倣され、KC1につながる可能性は十分にあり得ることである。これはKC1の第三主葉が脇区に切られてしまうような文様面でのミスを犯していることからもうかがえる。

KBとKC2は、KAとKC1に比べてやや小さい特徴があり、出土量も少なくセット関係となる可能性は高い。6304は、6689Aと「東」の線刻が同筆である6664Fとセットになる瓦である。松林苑では6689Aと6664Fが共伴し、同筆の「東」が線刻されていることから、6664Fとセットとなる6304と6689は同じ工房で同時期に生産された瓦の可能性が高い。つまり、KB・KC2を製作した人が6304と6689をセットとして模倣することは可能といえる。一方、6282や6284Ebは軒平瓦6721とセットで使用される瓦であり、平城宮において6689との接点はない。そして、6304や6689と比べて年代が下ることから、毛原庵寺で最初に使用された瓦はKBとKC2のセットの可能性が高い。その後遅れて6284Eb・6282を模倣したKAとKC2を模倣したKC1が使用されるようになったのであろう。

KBは6304、KC2は6689Aを模倣して製作された瓦であるが、祖型となった瓦の文様からさほど崩れていないことから、天平元年（729）に近い時期に生産された可能性が高い。一方KA・KC1は、『薬師寺縁起』記載の神亀2年（725）の年代と、夏見庵寺においてセットで使用されることから年代が古く考えられてきたが、平城宮の年代観から天平12年（740）に近い時期に生産された瓦と考えたい。



ちなみに夏見庵寺で出土したKAは毛原庵寺よりも範囲が進んでいること、毛原庵寺では確認されていない曲線額のものがあることから毛原庵寺よりもその年代はさらに下るものと考えられる。

(3) 創建時期

以上のことから、毛原庵寺は天平元年（729）に近い時期に創建されたと考えることができる。ただし、KB・KCがやや小さい瓦であることや出土量が多くないことから、創建当初は大規模な伽藍を持っておらず必要最低限の建物があっただけと推測される。これが天平12年（740）頃に現在みられるような大規模な寺院に変貌を遂げるようになったのであろう。

2. 毛原庵寺の廃絶時期について

続けて毛原庵寺の廃絶時期について検討していきたい。毛原庵寺では平安時代以降の瓦が一切出土しないこと、毛原庵寺そのものについて記載された史料が残っていないことから、瓦の年代である天平12年（740）以降に廃絶したとしか述べることができない。そのため、廃絶時期については瓦以外のものから考えていく必要がある。

毛原庵寺があった周辺地域については、奈良時代～平安時代の史料がいくつか残されている。これらの史料は毛原庵寺の周辺にあったとされる東大寺の板蠅枷についてのものである。そこでまずはこれらの史料から、板蠅枷と毛原庵寺の位置関係を再確認したい。そして、毛原庵寺の寺としての性格について言及し、それから毛原庵寺の廃絶時期について検討していきたい。

(1) 板蠅枷と毛原庵寺（図28）

板蠅枷に関する史料は奈良時代から平安時代に複数あるが、その四至について詳しく記載されている6つの史料を検討材料とする（史料①～⑥）。

東四至 ①に名張川とあるが、③④から板蠅枷が笠間川の西にある山を指していることがわかる。また、東の四至は名張川とあるが、②④から平安時代には笠間川と名張川の合流地点付近には広瀬牧と薦生牧があったことがわかつており、薦生牧は板蠅枷には入らないことが④に記載されている。そして、②から広瀬牧の西四至が板蠅枷北四至と同じ高峯となっていることから広瀬牧も含まない可能性が高く、広瀬の北で名張川と接するものと考えられる。

西四至 ①に小倉倉立蘿小野とある。小倉倉立は奈良市小倉町小字倉立、蘿小野は山添村神野山周辺と考えられる。北西は神野山を含む範囲と考えているものが多いが、後述するが毛原庵寺と異なり神野寺が廃絶することはないから板蠅枷の四至から外れる。

北四至 ①に八多前高峯并鏡瀧とある。八多は旧波多野村地域で現在も山添村大字西波多が残る。この地域の前にある高峯は、馬尻山・高雄山を指すと考えられる。富森盛一氏は、山添村大字中峯山にある鏡池を鏡瀧と考えている（富森1968）。

南四至 ①に斎王上路とある。奈良時代以前の斎宮へのルートは、飛鳥宮や藤原宮から交通の便が良い初瀬谷を通り、宇陀川に沿って名張に入るルートであった。しかし、奈良時代からは平城遷都したことによりルートが変更される。「続日本紀」靈龜元年（715）六月一日には、「開大倭国都祁山之道」とあり、「続日本紀」天平12年（740）の聖武天皇伊勢行幸において、都介堀越頓宮（10/29）、名張郡家（10/30）、阿保頓宮（11/1）と進んでいることから都祁山の道は、現在の奈良市都祁を通り、名張市に繋がるルートであったことがわかっている。平安遷都とともに斎宮へは近江国を経由する道が採用されるようになった。ただし、帰京するためのルートは吉凶の区別により2パターンがあったようで、斎王解任の理由が吉事である場合は往路と同じであるが、凶事であった場合は⑤⑥から都祁山の道で帰京していたことがわかる。また、⑥から名張市丈六から坂之下も

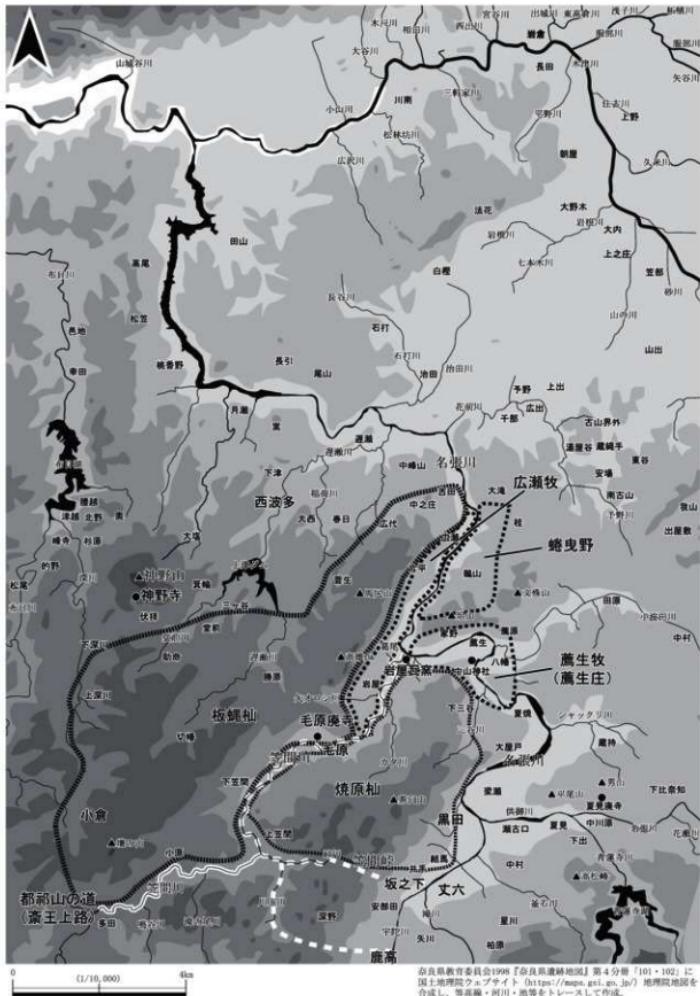


図28 毛原廃寺跡関係位置図



しくは鹿高を通って都祁へ抜けていたようだ。つまりは、斎王上路は上笠間から東に向かうルートと考えられる。ただし④から笠間川を使い木材を運んでいることから笠間川沿いにルートもあった可能性もある。また、直木孝次郎氏も笠間川に沿って毛原を通るルートが都祁山の道との考えを示している（直木1996）。当初、笠間川沿いのルートが斎王上路（都祁山の道）であったが、板蠅袖の四至に入り笠間川および笠間川沿いの道が木材流通に使用されるようになったことにより、ルート変更が余儀なくされた可能性も考えられよう。

以上のことから、図28で示した範囲が板蠅袖と考えることでき、既往の研究と同様に毛原庵寺は板蠅袖の中に入ることがわかる。これは、一部異なるが富森盛一氏が示した前期板蠅袖と近い範囲となる（富森1968）。

（2）毛原庵寺の性格

次に毛原庵寺の性格について検討していきたい。先述のとおり、板蠅袖の中に毛原庵寺が位置していると考えてよい。それゆえ、東大寺の袖管理や經營等のために建立された寺院である可能性が指摘されてきた経緯がある。しかし、松田真一氏により毛原庵寺出土瓦の年代が再検討されたことで、板蠅袖成立時期と毛原庵寺創建時期に齟齬が生じた（松田他1991）。近江後秀氏は、奈良盆地内の他の寺院の立地、史料、東部山間に多く残る仏教関連地名から毛原庵寺は、奈良県東部山間に仏教の聖地を求めようとした国家政策と、山林修行者管理のために平城京の東部山間に建立された山林寺院の一つであると考えた（松田他1991）。

確かに僧が法力を得るためにには、俗世間から離れた場所で修行する必要がある。ガンダーラにおいても、寺院は都市内とその近郊の山中にもあり、日本でも飛鳥時代から平地とともに山中に寺院が営まれていった。また、当時の政府は、山林修行で得た法力を高く評価しており、私的に山林での呪詛や民衆教化することに対して警戒心を抱いていた。現に、宝龟元年（770）には山林寺院で私的に一僧以上をあつめて、読経悔過することを禁止する法令が出されている。ただし山林修行は、申請すれば許可される行為であり、政府は強力な法力を持つことになる山林修行者達を管理しようとしていたようだ。

毛原庵寺と同時期の寺院で確実に山林修行の場として機能していた寺院に、吉野郡大淀町大字比曾に位置する飛鳥時代創建の比蘇寺（現光寺）がある。比蘇寺の伽藍（薬師寺式）は飛鳥地域南の高取山系南麓にある比較的平坦な場所に建立されている。伽藍は南面し、東には南で吉野川に接続する比曾川が、西には下ツ道につながる壇坂街道がある。南面する伽藍の北に山があること、都から一定距離離れていること、近くに川や街道があることなど、比蘇寺が建立された立地は、毛原庵寺と極めてよく似ている。また山間部にありながら平地とかわらない伽藍を持っている点も毛原庵寺と同様である。

比蘇寺は、「続日本紀」天平16年（744）の道慈卒伝に「枳門之秀」と称された道慈と神叡のうち、元興寺の唐僧神叡が修行した寺である。「延暦僧錄」神叡伝によると「唐思託作延暦僧錄云、沙門神叡唐学生也。因患制亭、便入芳野依現光寺結廬立志、披闈三歲、秉燭披灑、夙夜忘疲、逾二十年、妙通奧旨、智海淵沖、義雲門之龍象也。俗時伝云、芳野僧都得自然智。」とあり、比蘇寺で20年間修業し自然智を得たと記載されている。自然智とは、「虚空藏求聞持法」により得られるもので、元来人間が持っている記憶力を増大させることができるとされている（蘭田1957）。

また「元亨枳書」元興寺護命伝には、「白月入山、修虛空藏法、黒月歸寺誦習。」とある。これから護命が、月が満ち始めて満月に至るまでの15日間である白月は山に入り虚空藏法修め、満月後の16日から月末までの15日間である黒月には寺で修行していたことがわかる。この護命の修行も比蘇



寺でおこなわれたとの指摘があり、比蘇寺は「虚空藏求聞持法」をおこない自然智を得るための修行場として機能していた（蘭田1957）。

ところで、毛原庵寺も比蘇寺と同じように山林修行の場として機能していた可能性を示唆する史料がある。それは天平勝宝3年（751）頃に完成した『懐風藻』に記載された奈良時代の高僧道慈の詩である。その中に「五言、初春在竹溪山寺、於長王宅宴、追致辭、並序」とある。これは道慈が、長屋王邸での詩宴に招かれたが、竹溪山寺に止住し世俗から離れた身であることから、宴に参加することを辞退する旨が記載されている。これは長屋王の変が起きる天平元年（729）以前のもとのと考えられている。

竹溪山寺については、場所などの詳細が『懐風藻』に記載がされておらず不明だが、前述した都祁山の道と関係があったものと推測することができる。『都介野村史』では、奈良市都祁南之庄町にある都介野岳西南中腹の堂ヶ平にあったとされるが確認はない。古代においていわゆる都祁と呼ばれた範囲内で現在礎石と瓦が確認されている寺院は毛原庵寺と神野寺しかないことから、このいずれかが竹溪山寺である蓋然性は高い。神野寺は天平2年（730）に行基によって建立されたと伝わること、周辺から奈良時代中頃以降の土器や奈良時代後半の瓦が採集されていることから候補から外れる。直木孝次郎氏は、都祁山の道が毛原庵寺の南を通ると考えており、毛原庵寺と竹溪山寺には何らかの関係性があることを指摘している（直木1996）。

道慈は『元亨积書』に「慈在唐、逢密者得虚空藏求聞持法。」とあり、蘭田香融氏は虚空藏求聞持法については道慈が日本へもたらしたと考えている（蘭田1957）。のことから、道慈が竹溪山寺でおこなっていた修行は、虚空藏求聞持法による山林修行と考えることはできないだろうか。虚空藏求聞持法には「空虛靜處・淨室・塔廟・山頂・樹下」が不可欠とされる（蘭田1957）。毛原庵寺の本格的な伽藍整備は前述した通り天平12年（740）頃と考えられるが、西塔周辺では天平元年（729）頃のKBとKC2が採取されており、西塔は創建当初からあった可能性が高い（森川他1980）。つまり毛原庵寺には、比蘇寺のように虚空藏求聞持法を行うために必要な条件が創建当初から揃っていた蓋然性が高い。

以上のことから、毛原庵寺は奈良時代には道慈が修行していた「竹溪山寺」と呼ばれていた可能性があり、近江俊秀氏らが指摘するように山林修行のために利用されていた寺院と考えたい。おそらくは、天平元年（729）頃に毛原庵寺は小規模な山林寺院として建立され、天平12年（740）頃により多くの修行者を受け入れることができるように再整備がなされたのであろう。

（3）魔絶時期

板蠅枷として毛原庵寺を含む地域が東大寺に施入されることで、毛原庵寺周辺の山の木々が伐採されるようになっていく。史料④から笠間川西にある板蠅枷から大仏殿角木を伐採し、笠間川から名張川へと流していることがわかる。つまりは、板蠅枷で切り出された材木は笠間川を利用して運び出されていたことになる。

毛原庵寺は、前述の通り山林修行のために機能していた寺院である可能性が高く、周辺の木々が伐採されることにより山林修行の場としての性格が保てなくなってしまったことであろう。これが毛原庵寺魔絶の直接的な要因と考えられる。一方、板蠅枷の中に入らなかったため、木の伐採が進まなかった神野山南麓の神野寺は魔絶することなく山林寺院として法灯が続いている。

以上のことから毛原庵寺は、板蠅枷に施入される天平勝宝7歳（755）に近い時期に魔絶したものと考えたい。推定東塔跡などのように礎石はあるが瓦が確認されていない地点があることから、伽藍の再整備が完了する前に魔絶したのであろう。



伊賀国内に毛原庵寺と同範の瓦が見られるのは、伽藍整備完了前に廃絶した毛原庵寺で使用されていたもしくは使用する予定にあった建築部材等を転用した可能性も考えていく必要がある。特に伊賀国分寺は、毛原庵寺と同範瓦が出土するもその量は少ない。伊賀国分寺で主体的に出土する瓦は、平城宮では神護景雲元年（767）～宝亀元年（770）の年代観を持つ軒平瓦6763に類似している（梶原2010）。毛原庵寺の廃絶時期に国分寺の創建時期が近いことからその最有力候補といえる。

3.まとめ

本稿では、毛原庵寺の創建時期と廃絶時期について再検討した。毛原庵寺の創建時期は瓦の年代から天平元年（729）頃、一方、廃絶時期は毛原庵寺周辺地域が板蠅袖となる天平勝宝7歳（755）に近い時期と考えられる。寺としての性格については、近江俊秀氏が指摘するとおり山林寺院として機能していたと考えたい。

現在、毛原庵寺では本格的な発掘調査は行われていない。そのため未だ主要伽藍の詳細がわからない状況にある。今後、伽藍中枢部において発掘調査が進んでいき、より詳細な伽藍の状況が明らかになっていくことを期待したい。（岡田）

史料

- ① 東大寺文書 孝謙天皇東大寺領施入勅 天平勝宝七歳（755）官符
「板蠅袖處 在伊賀郡名張鄧 四至東限名張河、南限斎王上路 西限小倉倉立蔵小野、北限八多前高峯并鏡瀬」
- ② 轉經院牧地等去文案 康和二年（962）八月廿日『平安道文』276
「一處在伊賀國名張鄧 字萬生（中略）四至東限垣田河并臺野少峯 南限少鮎瀬瀬并高峯 西限笠間河并大河 北限高峯」
「一處在大和國山邊都并伊賀國名張鄧碑在字公駿（中略）蛇曳野者 四至東限水堺山 南限高山西限大河 北限水堺并道路谷」
「地從河西牧地山地等 号広瀬牧者 四至東限大河 南限石屋并少野石村笠間河 西限高峯 北限路瀬并道」
- ③ 東大寺板蠅袖四至狀記案 文保元年（964）九月廿五日『平安道文』280
「右件板蠅袖と云は、是名張河より西方爾來会笠間河西方乃高峯起大留山也。」
- ④ 伊賀国夏見鄉刀禰等解案 康保三年（966）四月二日『平安道文』289
「所謂板蠅袖者、是在笠間河西方、燒原袖者在笠間河東方、笠間河者是從南流北、其末出會名張河、是即薦牛牧西至也（中略）而以先年東大寺前別當僧都（光智）、為令造大仏殿舟木入事件板蠅袖、被造出件角木、即曳出笠間河名張河川合西方山下、其次放使、令榜示四至、板蠅袖東四至、其所薦牛御牧辰巳方、名張河流字桜瀬南頭、即稱云、件板蠅袖東四至是河也云々、然即薦牛牧可入袖四至内云々（中略）名張河是成（所脫カ）流北、或所流丑寅、或所流亥寅、或所流酉、或所流未申、隨其所々方、流末不同也、但至于薦牛御牧、件名張河、始從桜瀬頭流北、迨箕輪流至未申方笠間河川合、件御牧即此箕輪内地也、然即治田新開地并公田等、是■薦牛御牧南四至高峯腰加帶、添置山下、牧地是從田北方、從河南方也、中有隣□□□其地、以是為御牧地、但板蠅袖東四至、若指名張河、南四至指倉宮上路者、其内地併寺家計町段步數、可被領掌者也、件東南四至内、敢不可有他領、然而件名張河西、薦牛御牧上方、添山所在寺神領田畠、私人領地公田、其數已多、或号夏燒、然而其領主各別也、併非東大寺領、以有其紙繕、又以笠間河、指板蠅袖東四至者、相去御牧數里、又玄雀也、又燒原袖者、是薦牛御牧南四至、最高峯去數里所有山也、然而以先年前別當僧都、所被指入板蠅袖四至内也、（以下略）」



- ⑤ 江家次第 竜王燐京次第 平安時代後期
「一日、一志頬宮に着く。二日、川口頬宮に着く。三日、伊賀堺屋に至る。神祇官舉祭に奉仕し、御浴を供す。
新輿到来す。伊賀堺屋以後は国史調査し、阿保頬宮に着く。四日、名張横河で禊し、大和都介頬宮に就く。
五日、山城相楽頬宮に至る。」
- ⑥ 順広王記 長寛三年（1165）
「十九日前斎宮立本寮、迎少弁行隆王兼降也
亥刻著逸志宿、廿日牛時逸志駅家、廿一日晚著伊世河口、午後出御、万事不具乃故也、廿一日戌時、著伊
賀山中、一宿了、無先刻、迎御與散々引破如薪、結合持參也、凡無先例事也、廿二日著伊賀河口、廿三日
黒田丈六堂云。」

参考・引用文献（刊行年順）

- 閑野貞1902「大和國毛原伽藍遺跡」「考古界」第一篇第九号 考古学会
- 西崎辰之助1918「毛原廬寺跡」「奈良縣史跡勝地調査会報告書V」奈良県（1978復刻）
- 古江亮仁1954「奈良時代に於ける山寺の研究」「大正大学研究紀要」39 大正大学出版部
- 蘭田香織1957「古代仏教における山林修行とその意義—特に自然智宗をめぐって—」「南都仏教」4 南都仏教研究会
- 豊原村史編纂委員会1960「豊原村史」
- 波多野村史編纂委員会1962「波多野村史」
- 室生村史編集委員会1966「室生村史」
- 富森盛一1968「黒田庄誌」赤目出版会
- 針ヶ別所村史編纂委員会1969「針ヶ別所村史」
- 中貞夫1974「名張市史」名張地方研究会
- 奈良県立橿原考古学研究所1978「岩屋瓦窯発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報1978年度」
- 森川桜男・山田猛1980「伊賀國分僧寺出土瓦とその周辺」「古代研究」21 元興寺文化財研究所
- 堀池春峰1982「南都仏教史下(諸寺篇)」法藏館
- 足利健亮1985「日本古代地理研究」大明堂
- 奈良県立橿原考古学研究所1985「岩屋瓦窯発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報1985年（第一分冊）」
- 奈良県山辺郡都祁村教育委員会内都祁村史刊行会1985「都祁村史」
- 榮原永遠男1986「大和と伊勢を結ぶ道」「季刊明日香風」17財團法人飛鳥保存財团
- 速日出典1986「奈良朝山岳寺院の実相」「論集日本仏教史」第二卷 奈良時代 雄山閣出版
- 奈良県立橿原考古学研究所・山添村教育委員会1990「山添村 毛原寺周辺における遺跡調査—試掘調査報告」
- 速日出典1991「奈良朝山岳寺院の研究」名著出版
- 松田真一・近江俊秀1991「毛原庵寺の研究・基礎資料の集成と若干の考察 - 」「橿原考古学研究所紀要 考古學論 改」第15冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 奈良県立橿原考古学研究所・山添村教育委員会1992「山添村毛原周辺遺跡—第6次一発掘調査概報」
- 山添村史編さん委員会1993「山添村史」上巻 山添村役場
- 佐伯博光1994「土管考」「文化財学論集」奈良大学文学部文化財学科
- 中世土器研究会1995「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社
- 直木孝次郎1996「日本古代国家の成立」株式会社講談社
- 奈良国立文化財研究所1996「平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧」



- 上井久義1998「春日と都祁山の道」『網干善教先生古希記念考古学論集上巻』網干善教先生古希記念会
斎宮歴史博物館1998『特別展 斎王群行と伊勢への旅』
- 日本地名学研究所編1998『大和古代地名辞典』株式会社五月書房
- 丸山幸彦2001『古代東大寺莊園の研究』株式会社浜水社
- 上原真人2002『古代の平地寺院と山林寺院』『佛教藝術』265 每日新聞社
- 古代交通研究会編2004『日本古代道路辞典』八木出版
- 都祁村史編纂委員会2005『改訂都祁村史』
- 小野木ルリコ 2006 「飛鳥寺西門出土土管の検討－制作技法にみる飛鳥寺造瓦工人との関連を中心に－」『史泉』103 関西大学史学・地理学会
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2007『春季特別展 山の神と山の仏－山岳信仰の起源をさぐる－』
- 奈良県立橿原考古学研究所2008『大西塚ノ本遺跡（奈良県文化財調査報告第123集）』
- 橿原義美2010『国分寺瓦の研究』名古屋大学出版会
- 松本信道2012「道慈の律師辞任とその背景」『駒澤史学』第79号 駒澤史学会
- 松本信道2014「『猿風藻』駿道慈詩・序の再検討」『駒澤大学仏教文学研究』(17) 駒澤大学仏教文学研究所
- 森郁夫2014『一五一説：瓦からみる日本古代史』淡交社
- 奈良県立橿原考古学研究所2017「毛原庵寺」「奈良県遺跡調査概報2016年度（第1分冊）』
- 奈良大学博物館2019『謳の大寺 奈良県山添村毛原庵寺跡—史跡保存の100年—』

あとがき

発掘調査報告書としてはささやかなものではあるが、なんとか刊行にこぎつけることができた。私としては30年ぶりの報告書だけに、安堵している。山添村教育委員会から、このたびの整理作業を打診されたのは、2017年6月、奈良大学博物館の企画展の資料返却で山添村を訪れたときであった。

私はどうしても毛原庵寺の現地を見たかった。企画展のパネルで、民家のそばに大きな礎石が整然と並ぶ風景に強い関心をいただいたからである。史跡の風景としてはじつに魅力的なものであった。

しかし、長く整理現場から遠ざかっていた私には、それを完遂する自信はなかった。それで

も、調査経緯を調べてみると、調査担当の田部剛士さんをはじめ現場関係者の多くが本学文化財学科の卒業生であり、報告書刊行が待望されていることを知った。まずは授業で整理作業を始めることにした。

多くの学生が参加する半期の授業では、おもに水洗・注記まで終えた。その後2年間の報告書完成までは、ゼミの学生・院生数名が担当した。私の指示もあったが、自主的に作業の段取りを考えて進めてくれた。この間、大学博物館の展示・図録作成もこなしている。この報告書刊行は、学生たちの献身的な作業のおかげである。そのことを明記してあとがきとしたい。

(坂井秀弥)





写 真 図 版





图版 1



軒丸瓦



円筒状瓦製品

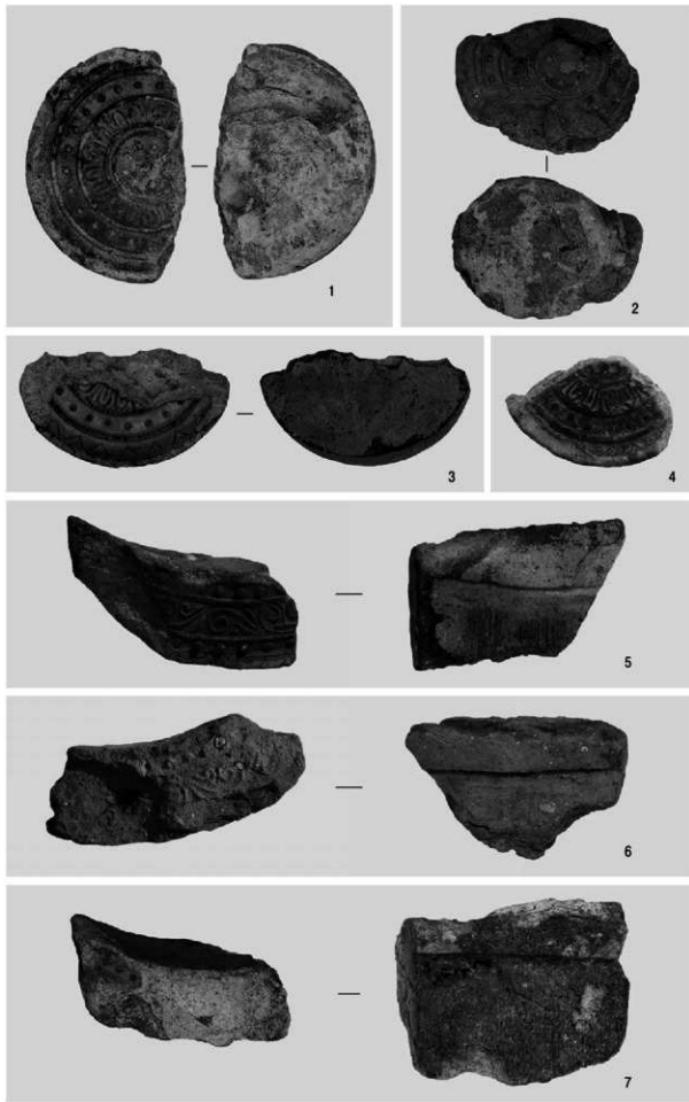




軒丸瓦当三次元計測図 軒丸瓦（1・2）、軒平瓦（5）



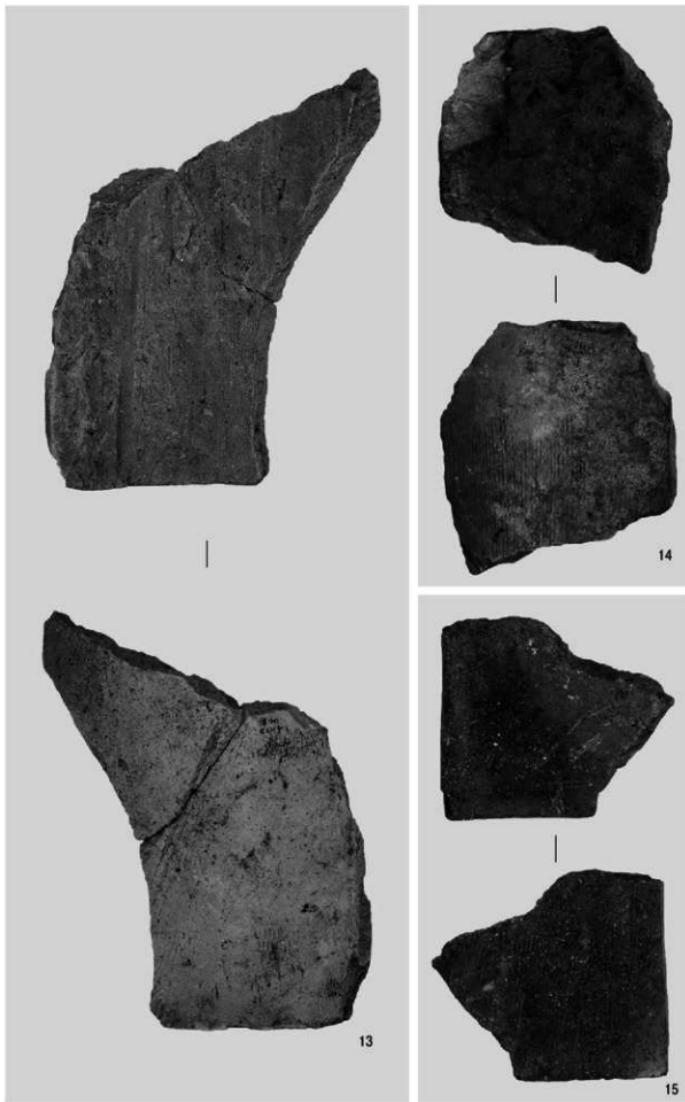
图版 3



軒丸瓦 (1~4)、軒平瓦 (5~7) ($S = 1/3$)



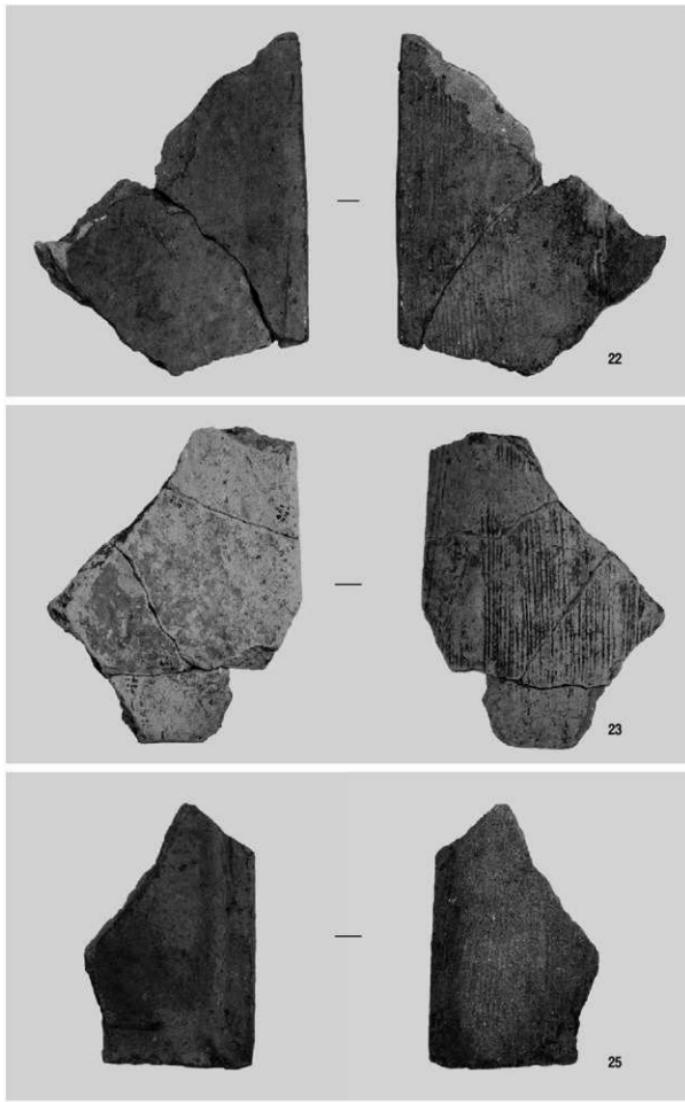
图版 4



平瓦 A1類 (13·14)、B2類 (24) ($S = 1/3$)



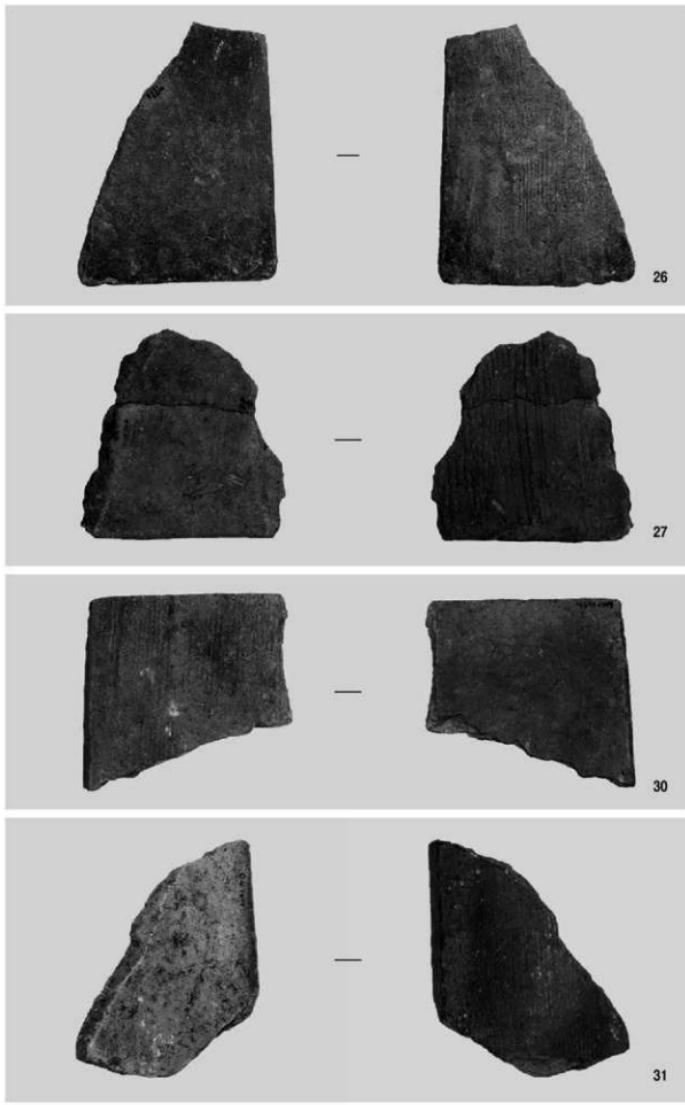
图版 5



平瓦 B2類 (22·23·25) (S = 1/3)



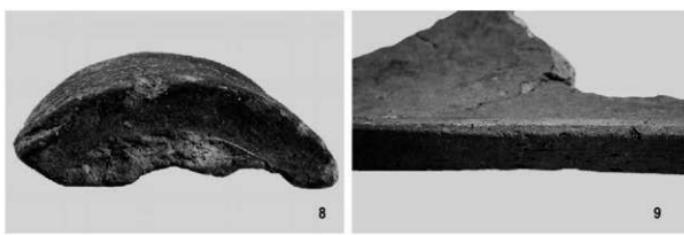
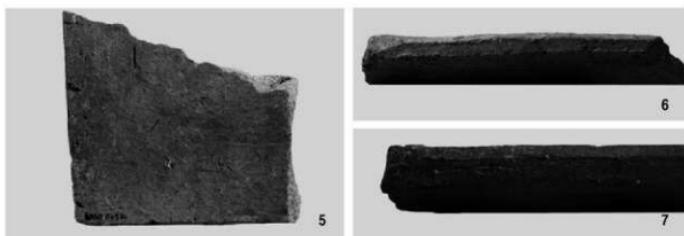
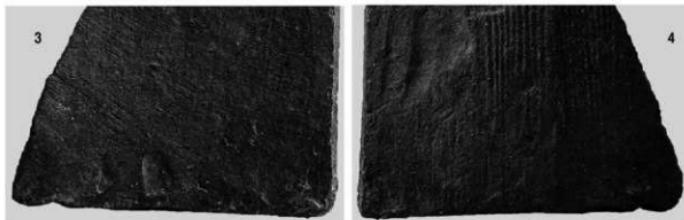
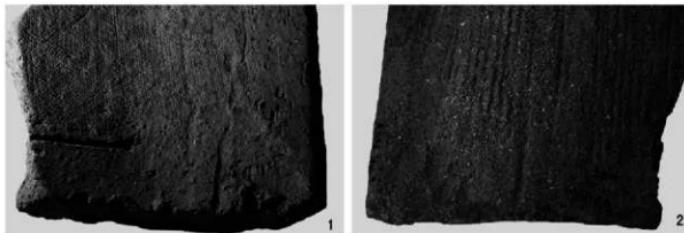
图版 6



平瓦 B2類 (26·27)、B3類 (31) ($S = 1/3$)

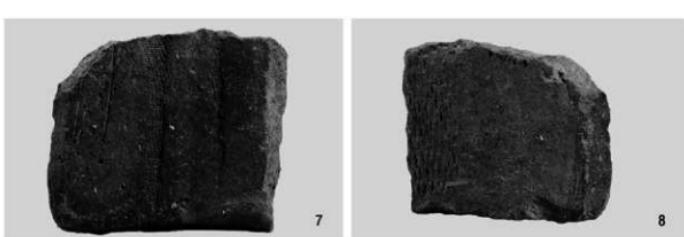
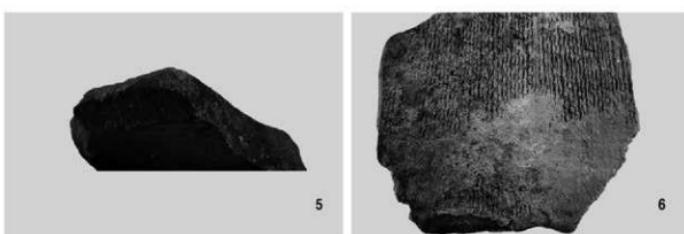
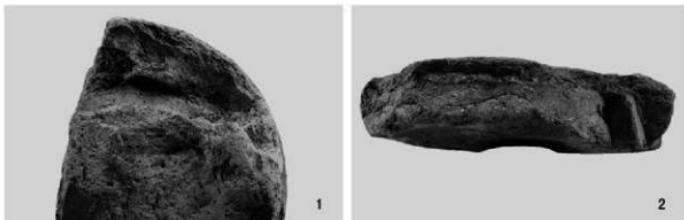


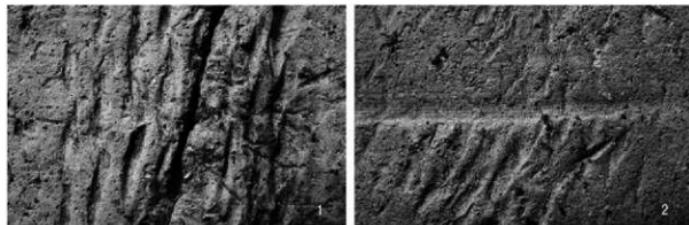
图版 7





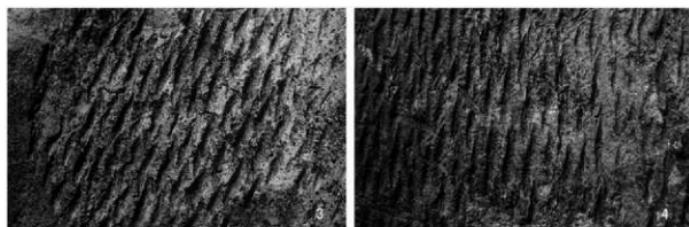
图版 8





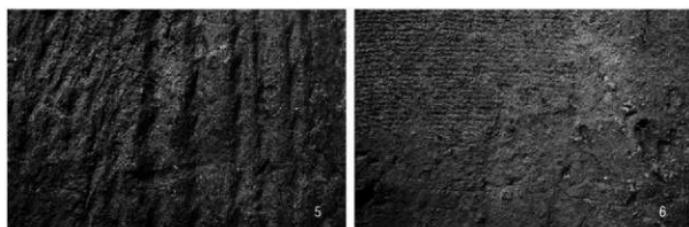
1 平瓦 A1類 (13) 凸面

2 平瓦 A1類 (13) 凸面



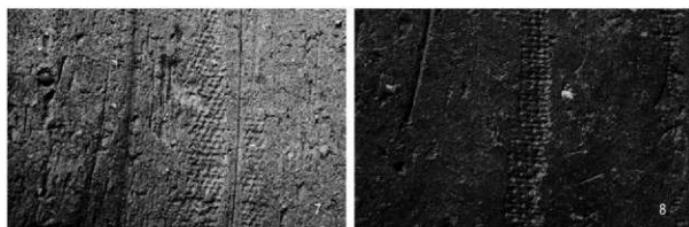
3 平瓦 A1類 (15) 凸面

4 平瓦 A1類 (14) 凸面



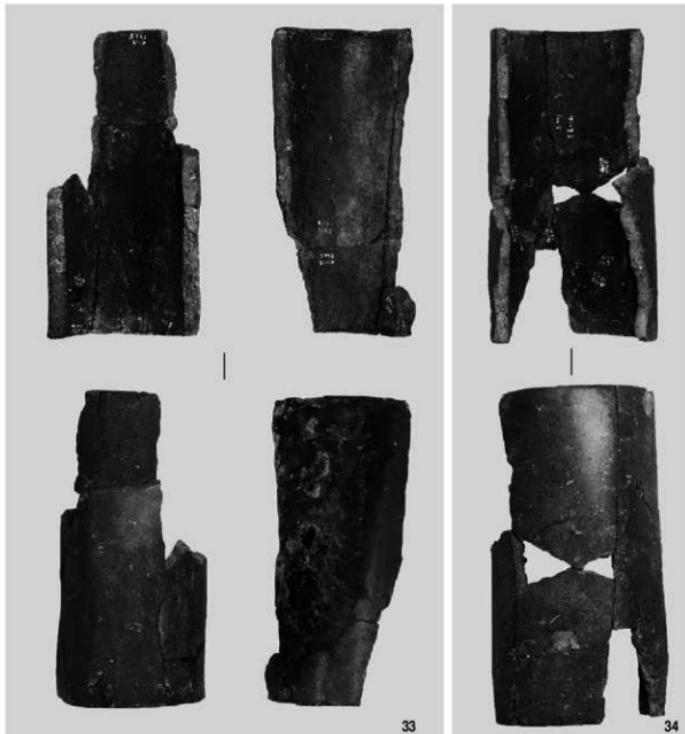
5 平瓦 B2類 (27) 凸面

6 平瓦 B2類 (25) 凹面

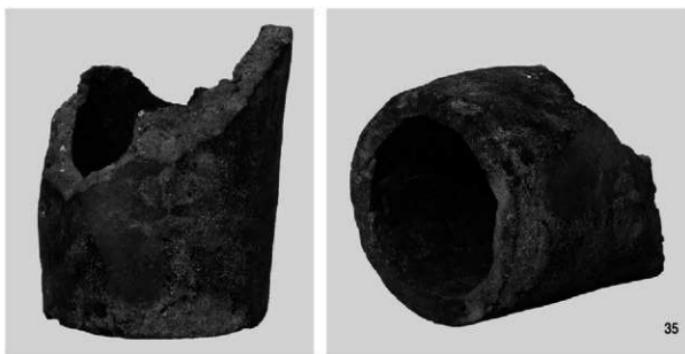


7 平瓦 A1類 (13) 凹面

8 平瓦 A1類 (19) 凹面



円筒状瓦製品







報 告 書 抄 錄

ふりがな	けはらはいじあと
書名	毛原廃寺跡
副書名	第2次発掘調査報告書
卷次	一
シリーズ名	山添村埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第3集
編著者名	坂井秀弥・田部剛士・岡田雅彦・井上有貴・向井一俊・植垣僚・田中秀弥・滑川有花子・野田真菜・西田裕之・川嶋泰輔
編集機関	山添村教育委員会・奈良大学文学部文化財学科
発行機関	山添村教育委員会
所在地	〒630-2344 奈良県山辺郡山添村大字大西151 TEL: 0743-85-0049
発行年月日	2020年3月31日

所取遺跡名	所在地	調査次数	遺跡コード	調査期間	調査面積	調査原因
毛原廃寺跡	山添村大字毛原	第2次	102-0012	2004/8/18 ~ 2004/11/22	約132m ²	毛原簡易水道改良整備事業に伴う事前調査

所取遺跡名	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
毛原廃寺跡	寺院跡	金堂礎石	軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦	



毛原廃寺跡 第2次発掘調査報告書	
編集・発行	山添村教育委員会
〒	630-2344
	奈良県山辺郡山添村大字大西151
TEL	0743-85-0049
FAX	0743-85-0219
発行年月日	2020年3月31日
印 刷	株式会社 天理時報社